



サーバ関連ポリシーの設定

この章の内容は、次のとおりです。

- [BIOS の設定, 1 ページ](#)
- [CIMC セキュリティ ポリシー, 67 ページ](#)
- [ローカル ディスク 設定ポリシーの設定, 73 ページ](#)
- [スクラブ ポリシーの設定, 87 ページ](#)
- [DIMM エラー管理の設定, 90 ページ](#)
- [Serial over LAN ポリシーの設定, 93 ページ](#)
- [サーバ自動構成ポリシーの設定, 95 ページ](#)
- [サーバディスカバリ ポリシーの設定, 97 ページ](#)
- [サーバ継承ポリシーの設定, 100 ページ](#)
- [サーバプール ポリシーの設定, 102 ページ](#)
- [サーバプール ポリシーの資格情報の設定, 104 ページ](#)
- [vNIC/vHBA 配置ポリシーの設定, 119 ページ](#)
- [CIMC マウント vMedia, 133 ページ](#)

BIOS の設定

サーバ BIOS 設定

Cisco UCS では、Cisco UCS ドメイン内のサーバの BIOS 設定をグローバルに変更する 2 種類の方法が用意されています。サーバまたはサーバの集合のニーズに合う特定の BIOS 設定グループを含む BIOS ポリシーを 1 つ以上作成するか、特定のサーバプラットフォームに対するデフォルトの BIOS 設定を使用できます。

BIOS ポリシーおよびサーバプラットフォームのデフォルトの BIOS 設定のいずれを使用しても、Cisco UCS Manager によって管理されているサーバの BIOS 設定を微調整できます。

データセンターのニーズに応じて、同じ Cisco UCS ドメイン内の一部のサービス プロファイルに BIOS ポリシーを設定して、他のサービス プロファイルにデフォルトの BIOS 設定を使用するか、そのいずれかのみを使用することができます。また、Cisco UCS Manager を使用して、サーバの実際の BIOS 設定を表示し、それらが現在のニーズを満たしているかどうかを確認できます。



(注) Cisco UCS Manager は、BIOS ポリシーまたはデフォルトの BIOS 設定による BIOS 設定の変更を Cisco Integrated Management Controller (CIMC) バッファにプッシュします。これらの変更はバッファ内にとどまり、サーバがリブートされるまでは有効になりません。

設定するサーバで BIOS 設定のサポートを確認することをお勧めします。RAS メモリのミラーリング モードなどの一部の設定は、すべての Cisco UCS サーバでサポートされているわけではありません。

メイン BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できるメイン サーバ BIOS 設定の一覧を示します。

名前	説明
[BIOS 設定変更時のリブート (Reboot on BIOS Settings Change)] set reboot-on-update	1 つ以上の BIOS 設定を変更した後、サーバをリブートするタイミング。 yes : この設定を有効にした場合、サーバはそのサービス プロファイルのメンテナンス ポリシーに従ってリブートされます。たとえば、メンテナンス ポリシーでユーザの確認応答が必要な場合、サーバはリブートされず、ユーザが保留中のアクティビティを確認するまで BIOS の変更は適用されません。 no : この設定を有効にしない場合は、他のサーバ設定の変更によるリブートであろうと、手動によるリブートであろうと、BIOS の変更は次回サーバがリブートされるまで適用されません。

名前	説明
[Quiet Boot] set quiet-boot-config quiet-boot	BIOS が Power On Self-Test (POST) 中に表示する内容。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : BIOS はブート中にすべてのメッセージとオプション ROM 情報を表示します。 • [有効 (Enabled)] : BIOS はロゴ画面を表示しますが、ブート中にメッセージやオプション ROM 情報を表示しません。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[Post エラー一時停止 (Post Error Pause)] set post-error-pause-config post-error-pause	POST 中にサーバで重大なエラーが発生した場合の処理。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : BIOS はサーバのブートを続行します。 • [有効 (Enabled)] : POST 中に重大なエラーが発生した場合、BIOS はサーバのブートを一時停止し、Error Manager を開きます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[停電時に AC を再開 (Resume Ac On Power Loss)] set resume-ac-on-power-loss-config resume-action	予期しない電力損失後に電力が復帰したときにサーバがどのように動作するかを決定します。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [オフのまま (stay-off)] : 手動で電源をオンにするまでサーバの電源がオフになります。 • [最後の状態 (last-state)] : サーバの電源がオンになり、システムが最後の状態を復元しようとします。 • [リセット (reset)] : サーバの電源がオンになり、自動的にリセットされます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[前面パネルのロックアウト (Front Panel Lockout)]</p> <p>set front-panel-lockout-config front-panel-lockout</p>	<p>前面パネルの電源ボタンとリセット ボタンがサーバによって無視されるかどうかを決定します。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)]: 前面パネルの電源ボタンとリセットボタンはアクティブであり、サーバに影響を与えるために使用できます。 • [有効 (Enabled)]: 電源ボタンとリセットボタンはロックアウトされます。サーバをリセットしたり、電源をオンにしたりできるのは、CIMC GUI からだけです。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default]: BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[一貫したデバイスの命名 (Consistent Device Naming)]</p> <p>set consistent-device-name-control cdn-name</p>	<p>一貫したデバイスの命名によって、一貫した方法でイーサネットインターフェイスに名前を付けることができます。これによりイーサネットインターフェイスの名前は、より統一され、識別しやすくなり、アダプタや他の設定に変更が加えられても永続的に保持されます。</p> <p>一貫したデバイスの命名を有効にするかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)]: 一貫したデバイスの命名はBIOSポリシーで無効になっています。 • [有効 (Enabled)]: 一貫したデバイスの命名がBIOSポリシーで有効になります。これにより、イーサネットインターフェイスに一貫した方法で命名できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default]: BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

プロセッサの BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できるプロセッサ BIOS 設定の一覧を示します。

[名前 (Name)]	説明
<p>[ターボ ブースト (Turbo Boost)] set intel-turbo-boost-config turbo-boost</p>	<p>プロセッサで Intel Turbo Boost Technology を使用するかどうか。このテクノロジーでは、仕様よりも低い電力、温度、または電圧でプロセッサが動作していると、自動的にそのプロセッサの周波数が上がります。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサの周波数は自動的に上がりません。 • [有効 (Enabled)] : 必要に応じてプロセッサで Turbo Boost Technology が利用されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[Enhanced Intel Speedstep] set enhanced-intel-speedstep-config speed-step</p>	<p>プロセッサで Enhanced Intel SpeedStep Technology を使用するかどうか。このテクノロジーでは、プロセッサの電圧やコア周波数をシステムが動的に調整できます。このテクノロジーにより、平均電力消費量と平均熱発生量が減少する可能性があります。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサの電圧または周波数を動的に調整しません。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサで Enhanced Intel SpeedStep Technology が使用され、サポートされているすべてのスリープ状態でさらに電力を節約することが可能になります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>オペレーティングシステムがこの機能をサポートするかどうかについては、オペレーティングシステムのベンダーに問い合わせることを推奨します。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[ハイパー スレッディング (Hyper Threading)]</p> <p>set hyper-threading-config hyper-threading</p>	<p>プロセッサで Intel Hyper-Threading Technology を使用するかどうか。このテクノロジーでは、マルチスレッドソフトウェアアプリケーションのスレッドを各プロセッサ内で並列に実行できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサでのハイパースレッディングを禁止します。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサでの複数スレッドの並列実行を許可します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>オペレーティングシステムがこの機能をサポートするかどうかについては、オペレーティング システムのベンダーに問い合わせることを推奨します。</p>
<p>[コア多重処理 (Core Multi Processing)]</p> <p>set core-multi-processing-config multi-processing</p>	<p>CPUあたりのパッケージの論理プロセッサコアの状態を設定します。この設定を無効にすると、Intel Hyper Threading テクノロジーも無効になります。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [すべて (all)] : すべての論理プロセッサコアの多重処理を有効にします。 • [1 ~ n] : サーバで実行可能な CPU あたりの論理プロセッサコアの数を指定します。多重処理を無効にして、サーバで実行される CPU あたりの論理プロセッサ コアを1個のみにするには、[1] を選択します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>オペレーティングシステムがこの機能をサポートするかどうかについては、オペレーティング システムのベンダーに問い合わせることを推奨します。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[無効ビットの実行 (Execute Disabled Bit)]</p> <p>set execute-disable bit</p>	<p>サーバのメモリ領域を分類し、アプリケーションコードを実行可能な場所を指定します。この分類の結果、悪意のあるワームがバッファにコードを挿入しようとした場合、プロセッサでコードの実行を無効にします。この設定は、損害、ワームの増殖、および特定クラスの悪意のあるバッファオーバーフロー攻撃を防止するのに役立ちます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサでメモリ領域を分類しません。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサでメモリ領域を分類します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>オペレーティングシステムがこの機能をサポートするかどうかについては、オペレーティングシステムのベンダーに問い合わせることを推奨します。</p>
<p>[仮想化テクノロジー (VT) (Virtualization Technology (VT))]</p> <p>set intel-vt-config vt</p>	<p>プロセッサで Intel Virtualization Technology を使用するかどうか。このテクノロジーでは、1つのプラットフォームで、複数のオペレーティングシステムとアプリケーションをそれぞれ独立したパーティション内で実行できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサでの仮想化を禁止します。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサで、複数のオペレーティングシステムをそれぞれ独立したパーティション内で実行できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) このオプションを変更した場合は、設定を有効にするためにサーバの電源を再投入する必要があります。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[ハードウェアプリフェッチャ (Hardware Pre-fetcher)]</p> <p>set processor-prefetch-config hardware-prefetch</p>	<p>プロセッサで、インテルハードウェアプリフェッチャが必要に応じてデータおよび命令ストリームをメモリから取得し、統合2次キャッシュに入れることを許可するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)]: ハードウェアプリフェッチャは使用しません。 • [有効 (Enabled)]: プロセッサで、キャッシュの問題が検出されたときにプリフェッチャを使用します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default]: BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) この値を指定するには、[CPUPerformance] を [カスタム (Custom)]に設定する必要があります。[カスタム (Custom)]以外の値の場合は、このオプションよりも、選択された CPU パフォーマンスプロファイルの設定が優先されます。</p>
<p>[隣接キャッシュラインプリフェッチャ (Adjacent Cache Line Pre-fetcher)]</p> <p>set processor-prefetch-config adjacent-cache-line-prefetch</p>	<p>プロセッサで必要な行のみを取得するのではなく、偶数または奇数のペアのキャッシュ行を取得するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)]: プロセッサで必要な行のみを取得します。 • [有効 (Enabled)]: プロセッサで必要な行およびペアの行の両方を取得します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default]: BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) この値を指定するには、[CPUPerformance] を [カスタム (Custom)]に設定する必要があります。[カスタム (Custom)]以外の値の場合は、このオプションよりも、選択された CPU パフォーマンスプロファイルの設定が優先されます。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[DCU ストリーマー プリフェッチ (DCU Streamer Pre-fetch)]</p> <p>set processor-prefetch-config dcu-streamer-prefetch</p>	<p>プロセッサでDCU IP Prefetch メカニズムを使用して履歴キャッシュ アクセス パターンを分析し、L1 キャッシュ内で最も関連性の高い行をプリロードします。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)]: プロセッサはキャッシュ読み取り要求を予測しようとせず、明示的に要求された行のみを取得します。 • [有効 (Enabled)]: DCU Prefetcher でキャッシュ読み取りパターンを分析し、必要と判断した場合にキャッシュ内の次の行を事前に取得します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)]:[platform-default]: BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[DCU IP プリフェッチ (DCU IP Pre-fetcher)]</p> <p>set processor-prefetch-config dcu-ip-prefetch</p>	<p>プロセッサでDCU IP Prefetch メカニズムを使用して履歴キャッシュ アクセス パターンを分析し、L1 キャッシュ内で最も関連性の高い行をプリロードします。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)]: プロセッサでキャッシュデータをプリロードしません。 • [有効 (Enabled)]: DCU IP Prefetcher で最も関連性が高いと判断されたデータを含む L1 キャッシュをプリロードします。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)]:[platform-default]: BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

[名前 (Name)]	説明
<p>[Direct Cache Access]</p> <p>set direct-cache-access-config access</p>	<p>プロセッサで、データを I/O デバイスから直接プロセッサ キャッシュに入れることにより、I/O パフォーマンスを向上させることができます。この設定はキャッシュミスが減らすのに役立ちます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : データは I/O デバイスから直接プロセッサ キャッシュには入れられません。 • [有効 (Enabled)] : データは I/O デバイスから直接プロセッサ キャッシュに入れられます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[プロセッサ C ステート (Processor C State)]</p> <p>set processor-c-state-config c-state</p>	<p>アイドル期間中にシステムが省電力モードに入ることができるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : システムは、アイドル時にも高パフォーマンス状態を維持します。 • [有効 (Enabled)] : システムは DIMM や CPU などのシステム コンポーネントへの電力を低減できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>オペレーティングシステムがこの機能をサポートするかどうかについては、オペレーティング システムのベンダーに問い合わせることを推奨します。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[プロセッサ C1E (Processor C1E)] set processor-c1e-config c1e</p>	<p>C1 に入ってプロセッサが最低周波数に遷移できるようにします。この設定は、サーバをリブートするまで有効になりません。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : CPU は C1 状態でも引き続き最大周波数で動作します。 • [有効 (Enabled)] : CPU は最小周波数に移行します。このオプションでは、C1 状態での最大電力量が削減されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[プロセッサ C3 レポート (Processor C3 Report)] ドロップダウンリスト set processor-c3-report-config processor-c3-report</p>	<p>プロセッサからオペレーティング システムに C3 レポートを送信するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサから C3 レポートを送信しません。 • [acpi-c2] : プロセッサは Advanced Configuration and Power Interface (ACPI) C2 フォーマットを使用して C3 レポートを送信します。 • [acpi-c3] : ACPI C3 フォーマットを使用してプロセッサから C3 レポートを送信します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>Cisco UCS B440 Server の場合、[BIOS 設定 (BIOS Setup)] メニューでこれらのオプションに対して [有効 (Enabled)] と [無効 (disabled)] が使用されます。[acpi-c2] または [acpi-c3] を指定すると、このサーバではそのオプションの BIOS 値に [有効 (Enabled)] が設定されます。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[プロセッサ C6 レポート (Processor C6 Report)]</p> <p>set processor-c6-report-config processor-c6-report</p>	<p>プロセッサからオペレーティング システムに C6 レポートを送信するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサから C6 レポートを送信しません。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサから C6 レポートを送信します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>Processor C7 Report</p> <p>set processor-c7-report-config processor-c7-report</p>	<p>プロセッサからオペレーティング システムに C7 レポートを送信するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサから C7 レポートを送信しません。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサから C7 レポートを送信します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[CPU パフォーマンス (CPU Performance)]</p> <p>set cpu-performance-config cpu-performance</p>	<p>サーバの CPU パフォーマンス プロファイルを設定します。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [エンタープライズ (Enterprise)] : M3 サーバに対して、すべてのプリフェッチャとデータの再利用が有効になります。M1 および M2 サーバについては、データの再利用と DCU IP プリフェッチャは有効になり、他のすべてのプリフェッチャは無効になります。 • [高スループット (high-throughput)] : データの再利用と DCU IP プリフェッチャは有効になり、他のすべてのプリフェッチャは無効になります。 • [hpc] : プリフェッチャはすべて有効になり、データの再利用は無効になります。この設定はハイパフォーマンスコンピューティングとも呼ばれます。

[名前 (Name)]	説明
<p>[最大 MTRR 変数の設定 (Max Variable MTRR Setting)]</p> <p>set max-variable-mtrr-setting-config processor-mtrr</p>	<p>平均修復時間 (MTRR) 変数の数を選択できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [自動最大 (auto-max)] : BIOS はプロセッサのデフォルト値を使用します。 • [8] : BIOS は MTRR 変数に指定された数を使用します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[ローカル X2 APIC (Local X2 APIC)]</p> <p>set local-x2-apic-config</p>	<p>Application Policy Infrastructure Controller (APIC) アーキテクチャタイプを設定できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [xapic] : 標準の xAPIC アーキテクチャを使用します。 • [x2apic] : 拡張 x2APIC アーキテクチャを使用してプロセッサの 32 ビットアドレス指定能力をサポートします。 • [自動 (auto)] : 検出された xAPIC アーキテクチャを自動的に使用します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

[名前 (Name)]	説明
<p data-bbox="349 296 732 327">[電源技術 (Power Technology)]</p> <p data-bbox="349 344 667 405">set processor-energy-config cpu-power-management</p>	<p data-bbox="815 296 1451 327">次のオプションの CPU 電源管理設定を指定できます。</p> <ul data-bbox="857 348 1281 474" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="857 348 1281 380">• Enhanced Intel Speedstep Technology <li data-bbox="857 396 1195 428">• Intel Turbo Boost Technology <li data-bbox="857 445 1151 476">• Processor Power State C6 <p data-bbox="815 512 1370 543">[Power Technology] は次のいずれかになります。</p> <ul data-bbox="857 564 1482 1245" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="857 564 1482 669">• [無効 (Disabled)] : サーバで CPU 電源管理は実行されず、前述の BIOS パラメータの設定が無視されます。 <li data-bbox="857 690 1482 795">• [Energy_Efficient] : 前述の BIOS パラメータに最適な設定が決定され、これらのパラメータの個々の設定は無視されます。 <li data-bbox="857 816 1482 921">• [パフォーマンス (Performance)] : サーバは前述の BIOS パラメータのパフォーマンスを自動的に最適化します。 <li data-bbox="857 942 1482 1079">• [カスタム (Custom)] : 前述の BIOS パラメータの個々の設定が使用されます。これらの BIOS パラメータのいずれかを変更する場合は、このオプションを選択する必要があります。 <li data-bbox="857 1100 1482 1245">• [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

[名前 (Name)]	説明
<p>[エネルギー パフォーマンス (Energy Performance)]</p> <p>set processor-energy-config energy-performance</p>	<p>システム パフォーマンスまたはエネルギー効率がこのサーバで重要かどうかを判断できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パフォーマンス • balanced-performance • balanced-energy • energy-efficient <p>• [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。</p> <p>(注) [CPUPowerManagement] を [カスタム (Custom)] に設定する必要があります。そのようにしない場合、このパラメータの設定は無視されます。</p>
<p>[周波数フロア オーバーライド (Frequency Floor Override)]</p> <p>set frequency-floor-override-config cpu-frequency</p>	<p>アイドル時に、CPUがターボを除く最大周波数よりも低い周波数にできるようにするかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : アイドル中に CPU をターボを除く最大周波数よりも低くできます。このオプションでは電力消費が低下しますが、システムパフォーマンスが低下する可能性があります。 • [有効 (Enabled)] : アイドル中に CPU をターボを除く最大周波数よりも低くできません。このオプションではシステム パフォーマンスが向上しますが、消費電力が増加することがあります。 <p>• [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[P-STATE 調整 (P-STATE Coordination)]</p> <p>set p-state-coordination-config p-state</p>	<p>BIOS がオペレーティング システムに P-state サポート モデルを通信する方法を定義できます。Advanced Configuration and Power Interface (ACPI) 仕様で定義される 3 つのモデルがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [HW_ALL] : プロセッサハードウェアが、依存性のある論理プロセッサ (パッケージ内のすべての論理プロセッサ) 間の P-state を調整します。 • [SW_ALL] : OS Power Manager (OSPM) が、依存性のある論理プロセッサ (物理パッケージ内のすべての論理プロセッサ) 間の P-state を調整します。すべての論理プロセッサで遷移を開始する必要があります。 • [SW_ANY] : OS Power Manager (OSPM) が、依存性のある論理プロセッサ (パッケージ内のすべての論理プロセッサ) 間の P-state を調整します。ドメイン内の任意の論理プロセッサで遷移を開始する場合があります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) [CPUPowerManagement] を [カスタム (Custom)]に設定する必要があります。そのようにしない場合、このパラメータの設定は無視されます。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[DRAM クロック スロットリング (DRAM Clock Throttling)]</p> <p>set dram-clock-throttling-config dram-clock-throttling</p>	<p>メモリ帯域幅と消費電力に関してシステム設定を調整できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [バランス (Balanced)] : DRAM クロック スロットリングを低下させ、パフォーマンスと電力のバランスをとります。 • [パフォーマンス (Performance)] : DRAM クロック スロットリングは無効です。追加の電力をかけてメモリ帯域幅を増やします。 • [Energy_Efficient] : DRAM のクロック スロットリングを上げてエネルギー効率を向上させます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[チャンネル インターリーブ (Channel Interleaving)]</p> <p>set interleave-config channel-interleave</p>	<p>CPUがメモリブロックを分割して、データの隣接部分をインターリーブされたチャンネル間に分散し、同時読み取り動作を有効にするかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [自動 (Auto)] : 実行するインターリーブを、CPUが決定します。 • [1-way] : 何らかのチャンネルインターリーブが使用されます。 • [2-way] • [3-way] • [4-way] : 最大量のチャンネルインターリーブが使用されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

[名前 (Name)]	説明
<p>[ランク インターリーブ (Rank Interleaving)]</p> <p>set interleave-config rank-interleave</p>	<p>1 つのランクを更新中に別のランクにアクセスできるよう、CPU がメモリの物理ランクをインターリーブするかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [自動 (Auto)] : 実行するインターリーブを、CPU が決定します。 • [1-way] : 何らかのランク インターリーブが使用されます。 • [2-way] • [4-way] • [8-way] : 最大量のランク インターリーブが使用されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[デマンドスクラブ (Demand Scrub)]</p> <p>set set scrub-policies config demand-scrub</p>	<p>CPU または I/O が読み取りを要求した場合に検出された 1 ビットのメモリ エラーを、システムが修正するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 1 ビット メモリ エラーは修正されません。 • [有効 (Enabled)] : 1 ビットメモリエラーがメモリ内部で修正され、修正されたデータが、読み取り要求に対する応答に設定されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

[名前 (Name)]	説明
<p>[パトロールスクラブ (Patrol Scrub)]</p> <p>set scrub-policies config patrol-scrub</p>	<p>システムがサーバ上のメモリの未使用部分でも単一ビットメモリエラーをアクティブに探して訂正するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : CPU がメモリアドレスの読み取りまたは書き込みを行うときのみ、システムはメモリの ECC エラーをチェックします。 • [有効 (Enabled)] : システムは定期的にメモリを読み書きして ECC エラーを探します。エラーが見つかり、システムは修正を試みます。このオプションにより、単一ビットエラーは複数ビットエラーになる前に修正される場合がありますが、パトロールスクラブの実行時にパフォーマンスが低下する場合があります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default]] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[高度 (Altitude)]</p> <p>set altitude altitude-config</p>	<p>物理サーバが設置されているおおよその海拔 (m) 。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [自動 (Auto)] : 物理的な高度を CPU によって判別します。 • [300_M] : サーバは、海拔約 300 m です。 • [900_M] : サーバは、海拔約 900 m です。 • [1500_M] : サーバは、海拔約 1500 m です。 • [3000_M] : サーバは海拔約 3000 メートルの位置にあります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default]] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

[名前 (Name)]	説明
[パッケージの C ステートの制限 (Package C State Limit)] ドロップ ダウンリスト set package-c-state-limit-config package-c-state-limit	

[名前 (Name)]	説明
	<p>アイドル時にサーバ コンポーネントが使用できる電力量。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [no-limit] : サーバは、使用可能な任意の C ステートに入ることがあります。 • [c0] : サーバはすべてのサーバコンポーネントに常にフルパワーを提供します。このオプションでは、最高レベルのパフォーマンスが維持され、最大量の電力が必要となります。 • [C1] : CPU のアイドル時に、システムは電力消費を少し減らします。このオプションでは、必要な電力が C0 よりも少なく、サーバはすばやくハイパフォーマンス モードに戻ることができます。 • [C3] : CPU のアイドル時に、システムは C1 オプションの場合よりもさらに電力消費を減らします。この場合、必要な電力は C1 または C0 よりも少なくなりますが、サーバがハイパフォーマンス モードに戻るのに要する時間が少し長くなります。 • [C6] : CPU のアイドル時に、システムは C3 オプションの場合よりもさらに電力消費を減らします。このオプションを使用すると、C0、C1、または C3 よりも電力量が節約されますが、サーバがフルパワーに戻るまでにパフォーマンス上の問題が発生する可能性があります。 • [C3] : CPU のアイドル時に、システムは C1 オプションの場合よりもさらに電力消費を減らします。この場合、必要な電力は C1 または C0 よりも少なくなりますが、サーバがハイパフォーマンス モードに戻るのに要する時間が少し長くなります。 • [C7] : CPU のアイドル時に、サーバはコンポーネントが使用できる電力量を最小にします。このオプションでは、節約される電力量が最大になりますが、サーバがハイパフォーマンス モードに戻るのに要する時間も最も長くなります。 • [C7s] : CPU のアイドル時に、サーバはコンポーネントが使用できる電力量を最小にします。このオプションでは、C7 よりも多い電力を節約できますが、サーバがハイパフォーマンス モードに戻るのに要する時間も最も長くなります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform

[名前 (Name)]	説明
	Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
CPU Hardware Power Management set cpu-hardware-power-management-config cpu-hardware-power-management	<p>プロセッサの Hardware Power Management (HWPM) を有効にします。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 • [disabled] : HWPM が無効になります。 • [hwpm-native-mode] : HWPM ネイティブモードが有効になります。 • [hwpm-oob-mode] : HWPM アウトオブボックスモードが有効になります。

Intel Directed I/O BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できる Intel Directed I/O BIOS 設定の一覧を示します。

名前	説明
[ダイレクト IO 向け VT (VT for Directed IO)] set intel-vt-directed-io-config vtd	<p>Intel Virtualization Technology for Directed I/O (VT-d) をプロセッサで使用するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサで仮想化テクノロジーを使用しません。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサで仮想化テクノロジーを使用します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) 他の Intel Directed I/O BIOS 設定を変更する場合は、このオプションを有効にする必要があります。</p>

名前	説明
[Interrupt Remap] set intel-vt-directed-io-config interrupt-remapping	プロセッサで Intel VT-d Interrupt Remapping をサポートするかどうか。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサでリマッピングをサポートしません。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサで VT-d Interrupt Remapping を必要に応じて使用します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[Coherency Support] set intel-vt-directed-io-config coherency-support	プロセッサで Intel VT-d Coherency をサポートするかどうか。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサでコヒーレンシをサポートしません。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサで VT-d Coherency を必要に応じて使用します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[ATS Support] set intel-vt-directed-io-config ats-support	プロセッサで Intel VT-d Address Translation Services (ATS) をサポートするかどうか。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサで ATS をサポートしません。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサで VT-d ATS を必要に応じて使用します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
[パススルー DMA サポート (Pass Through DMA Support)] set intel-vt-directed-io-config passthrough-dma	<p>プロセッサで Intel VT-d Pass-through DMA をサポートするかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : プロセッサでパススルー DMA をサポートしません。 • [有効 (Enabled)] : プロセッサで VT-d Pass-through DMA を必要に応じて使用します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

RAS メモリの BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できる RAS メモリの BIOS 設定の一覧を示します。

名前	説明
[メモリ RAS 設定 (Memory RAS Config)] set memory-ras-config ras-config	<p>サーバに対するメモリの Reliability, Availability, and Serviceability (RAS) の設定方法。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [最大パフォーマンス (Maximum Performance)] : システムのパフォーマンスが最適化されます。 • [ミラーリング (Mirroring)] : システムのメモリの半分をバックアップとして使用することにより、システムの信頼性が最適化されます。 • [ロックステップ (Lockstep)] : サーバ内の DIMM ペアが、同一のタイプ、サイズ、および構成を持ち、SMI チャンネルにまたがって装着されている場合、ロックステップモードを有効にして、メモリアクセス遅延の最小化およびパフォーマンスの向上を実現できます。B440サーバでは[ロックステップ (Lockstep)]がデフォルトで有効です。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[NUMA] set numa-config numa-optimization</p>	<p>BIOS で NUMA をサポートするかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : BIOS で NUMA をサポートしません。 • [有効 (Enabled)] : NUMA に対応したオペレーティングシステムに必要な ACPI テーブルを BIOS に含めます。このオプションを有効にした場合は、一部のプラットフォームでシステムのソケット間メモリインターリーブを無効にする必要があります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[ミラーリングモード (Mirroring Mode)] set memory-mirroring-mode mirroring-mode</p>	<p>メモリ ミラーリングは、メモリに2個の同じデータイメージを保存することにより、システムの信頼性を向上します。</p> <p>このオプションは、[メモリ RAS 設定 (Memory RAS Config)]で[ミラーリング (mirroring)]オプションを選択したときのみ使用可能です。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ソケット間 (inter-socket)] : メモリは、CPU ソケットをまたいで2台の Integrated Memory Controller (IMC) 間でミラーリングされます。 • [ソケット内 (intra-socket)] : 1台の IMC が同じソケットの別の IMC とミラーリングされます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[スペアリング モード (Sparing Mode)]</p> <p>set memory-sparing-mode sparing-mode</p>	<p>スペアリングはメモリを予備に保持することで信頼性を最適化し、別のDIMMの障害発生時に使用できるようにします。このオプションは、メモリの冗長性を実現しますが、ミラーリングほどの冗長性は提供されません。使用可能なスペアリングのモードは、現在のメモリの数によって異なります。</p> <p>このオプションは、[メモリ RAS 設定 (Memory RAS Config)]で[スペアリング (sparing)]オプションを選択したときのみ使用可能です。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [dimm スペアリング (dimm-sparing)] : 1枚のDIMMが予備に保持されます。DIMMに障害が発生すると、そのDIMMの内容はスペア DIMMに移されます。 • [ランク スペアリング (rank-sparing)] : DIMMのスペア ランクが予備に保持されます。あるランクのDIMMに障害が発生した場合、そのランクの内容がスペア ランクに移されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[LV DDR モード (LV DDR Mode)]</p> <p>set lv-dimm-support-config lv-ddr-mode</p>	<p>低電圧と高周波数のどちらのメモリ動作をシステムで優先するか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [省電力モード (power-saving-mode)] : 低電圧のメモリ動作が高周波数のメモリ動作よりも優先されます。このモードでは、電圧を低く維持するために、メモリの周波数が低下する可能性があります。 • [パフォーマンス モード (performance-mode)] : 高周波数の動作が低電圧の動作よりも優先されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
[DRAM リフレッシュ レート (DRAM Refresh Rate)]	<p>内部メモリ用の更新間隔レート。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1x • 2x • 3x • 4x • auto <p>• [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。</p>
[DDR3 電圧選択 (DDR3 Voltage Selection)] set Ddr3VoltageSelection	<p>デュアル電圧 RAM に使用される電圧。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DDR3-1500mv • DDR3-1350mv <p>• [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。</p>

シリアル ポートの BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できるシリアルポートの BIOS 設定の一覧を示します。

名前	説明
[シリアルポート A (Serial Port A)] set serial-port-a-config serial-port-a	シリアルポート A が有効か無効か。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (disabled)] : シリアルポートは無効になります。 • [有効 (enabled)] : シリアルポートが有効になります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

USB の BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できる USB BIOS 設定の一覧を示します。

名前	説明
[デバイスをブート不能にする (Make Device Non Bootable)] set usb-boot-config make-device-non-bootable	サーバが USB デバイスからブートできるかどうか。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (disabled)] : サーバは USB デバイスからブートできません。 • [有効 (enabled)] : サーバは USB デバイスからブートできます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[レガシー USB サポート (Legacy USB Support)]</p> <p>set LegacyUSBSupport</p>	<p>システムでレガシー USB デバイスをサポートするかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (disabled)] : USB デバイスは、EFI アプリケーションでのみ使用できます。 • [有効 (enabled)] : レガシー USB のサポートは常に使用できます。 • [自動 (auto)] : USB デバイスが接続されていない場合、レガシー USB のサポートを無効にします。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[システムアイドル時の USB 電力最適化設定 (USB System Idle Power Optimizing Setting)]</p> <p>set usb-system-idle-power-optimizing-setting-config usb-idle-power-optimizing</p>	<p>USB EHCI のアイドル時電力消費を減らすために USB システムにアイドル時電力最適化設定を使用するかどうか。この設定で選択した値によって、パフォーマンスに影響を受けることがあります。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [高パフォーマンス (high-performance)] : 最適なパフォーマンスを電力節約より優先するため、USB システムのアイドル時電力最適化設定は無効化されます。 <p>このオプションを選択すると、パフォーマンスが大幅に向上します。サイトにサーバの電源制限がない場合はこのオプションを選択することを推奨します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [アイドル時低消費電力 (lower-idle-power)] : 電力節約を最適なパフォーマンスより優先するため、USB システムのアイドル時電力最適化設定は有効化されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[フロントパネルのUSBアクセスロック (USB Front Panel Access Lock)]</p> <p>set usb-front-panel-access-lock-config</p> <p>usb-front-panel-lock</p>	<p>USB 前面パネル ロックは、USB ポートへの前面パネル アクセスを有効または無効にするために設定されます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 無効 • 有効 (enabled) • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[Port 60/64 エミュレーション (Port 60/64 Emulation)]</p> <p>set UsbEmul6064</p>	<p>完全な USB キーボード レガシー サポートのために 60h/64h エミュレーションをシステムでサポートするかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 60h/64 エミュレーションはサポートされません。 • [有効 (Enabled)] : 60h/64 エミュレーションはサポートされます。 <p>サーバで USB 非対応オペレーティングシステムを使用する場合は、このオプションを選択する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
[USB ポート：前面 (USB Port:Front)] set UsbPortFront	前面パネルの USB デバイスが有効か無効か。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 前面パネルの USB ポートを無効にします。これらのポートに接続されるデバイスは、BIOS およびオペレーティング システムによって検出されません。 • [有効 (Enabled)] : 前面パネルの USB ポートを有効にします。これらのポートに接続されるデバイスは、BIOS およびオペレーティング システムによって検出されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[USB ポート：内部 (USB Port:Internal)] set UsbPortInt	内部 USB デバイスが有効か無効か。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 内部 USB ポートを無効にします。これらのポートに接続されるデバイスは、BIOS およびオペレーティング システムによって検出されません。 • [有効 (Enabled)] : 内部 USB ポートを有効にします。これらのポートに接続されるデバイスは、BIOS およびオペレーティング システムによって検出されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
[USB ポート : KVM (USB Port:KVM)] set UsbPortKVM	KVMポートが有効か無効か。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : KVM キーボードおよびマウスデバイスを無効にします。キーボードとマウスは KVM ウィンドウで機能しなくなります。 • [有効 (Enabled)] : KVM キーボードおよびマウスデバイスを有効にします。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[USB ポート : 背面 (USB Port:Rear)] set UsbPortRear	背面パネルの USB デバイスが有効か無効か。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 背面パネルの USB ポートを無効にします。これらのポートに接続されるデバイスは、BIOS およびオペレーティングシステムによって検出されません。 • [有効 (Enabled)] : 背面パネルの USB ポートを有効にします。これらのポートに接続されるデバイスは、BIOS およびオペレーティングシステムによって検出されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[USB ポート : SD カード (USB Port:SD Card)] set UsbPortSdCard	SD カードドライブが有効か無効か。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : SD カードドライブを無効にします。SD カードドライブは、BIOS およびオペレーティングシステムによって検出されません。 • [有効 (Enabled)] : SD カードドライブを有効にします。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
[USB ポート : VMedia (USB Port:VMedia)] set UsbPortVMedia	仮想メディアデバイスが有効か無効か。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : vMedia デバイスを無効にします。 • [有効 (Enabled)] : vMedia デバイスを有効にします。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[すべての USB デバイス (All USB Devices)] set AllUsbDevices	すべての物理および仮想USBデバイスが有効であるか、無効であるか。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : すべての USB デバイスが無効になります。 • [有効 (Enabled)] : すべての USB デバイスが有効です。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

PCI 設定の BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できる PCI 設定の BIOS 設定の一覧を示します。

名前	説明
<p>[4GB 以下でメモリの最大化 (Max Memory Below 4G)]</p> <p>set max-memory-below-4gb-config max-memory</p>	<p>PAE サポートなしで動作しているオペレーティングシステムのメモリ使用率を、BIOS がシステム設定に応じて 4GB 以下で最大化するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)]: メモリ使用率を最大化しません。 PAE をサポートするオペレーティングシステムすべてにこのオプションを選択します。 • [有効 (Enabled)]: PAE をサポートしないオペレーティングシステムについて 4GB 以下でメモリ使用率を最大化します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default]: BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[4 GB を超えるメモリ マップド IO 構成 (Memory Mapped IO Above 4Gb Config)]</p> <p>set memory-mapped-io-above-4gb-config memory-mapped-io</p>	<p>64 ビット PCI デバイスの 4 GB 以上のアドレス空間に対するメモリ マップド I/O を有効にするか、無効にするか。レガシーなオプション ROM は 4GB を超えるアドレスにアクセスできません。PCI デバイスが 64 ビット対応でも、レガシーなオプション ROM を使用する場合は、この設定を有効にしても正しく機能しない場合があります。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)]: 64 ビット PCI デバイスを 4 GB 以上のアドレス空間にマッピングしません。 • [有効 (Enabled)]: 64 ビット PCI デバイスを 4 GB 以上のアドレス空間にマッピングします。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [platform-default]: BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[VGA Priority] set VGAPriority</p>	<p>システムに複数の VGA デバイスがある場合は、VGA グラフィックス デバイスのプライオリティを設定できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [オンボード (Onboard)] : プライオリティがオンボード VGA デバイスに与えられます。BIOS ポスト画面および OS ブートはオンボード VGA ポート経由で駆動されます。 • [オフボード (Offboard)] : プライオリティが PCIE グラフィックス アダプタに与えられます。BIOS ポスト画面および OS ブートは外部グラフィックスアダプタ ポート経由で駆動されます。 • [オンボード VGA を無効 (onboard-vga-disabled)] : PCIE グラフィックス アダプタにプライオリティが与えられ、オンボード VGA デバイスは無効になります。 <p>(注) オンボード VGA が無効の場合、vKVM は機能しません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default]] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) Cisco UCS B シリーズサーバでは、オンボード VGA デバイスのみがサポートされます。</p>
<p>[ASPM サポート (ASPM Support)] set ASPMSupport</p>	<p>BIOS での ASPM (アクティブ電源状態管理) サポートのレベルを設定できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : ASPM サポートは、BIOS で無効です。 • [自動 (auto)] : 電力状態を CPU によって判別します。 • [10 の強制 (force 10)] : すべてのリンクを強制的に L0 スタンバイ (L0s) 状態にします。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)] [[platform-default]] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

QPI の BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できる QPI BIOS 設定の一覧を示します。

名前	説明
[QPI リンク周波数 (QPI Link Frequency)] set qpi-link-frequency-select-config qpi-link-frequency-mt-per-sec	メガトランスファー/秒 (MT/s) 単位での Intel QuickPath Interconnect (QPI) リンク周波数。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • 6400 • 7200 • 8000 • [自動 (Auto)] : QPI リンク周波数は CPU によって決定されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[QPI スヌープ モード (QPI Snoop Mode)] set vfpisnoopmode vpqpisnoopmode	次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [home-snoop] : スヌープは、常に、メモリ コントローラのホームエージェント (集中型リング停止) によって起動されます。このモードは、早期スヌープよりローカル遅延が多いですが、未処理トランザクションが増えた場合に予備のリソースを使用できます。 • [cluster-on-die] : このモードは、コアが 10 以上のプロセッサでのみ使用できます。高度に NUMA 最適化されたワークロードに最適なモードです。 • [early-snoop] : 分散キャッシュ リング停止で、別のキャッシング エージェントにスヌープ プロブまたは要求を直接送信できます。このモードは、遅延が少なく、スレッド全体でデータセットを共有しているためにキャッシュ間転送からメリットが得られるワークロードや NUMA 最適化されていないワークロードに最適です。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

LOM および PCIe スロットの BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できる USB BIOS 設定の一覧を示します。

名前	説明
[PCIe スロット : SAS OptionROM (PCIe Slot:SAS OptionROM)] set slot-option-rom-enable-config pcie-sas	オプション ROM が SAS ポートで使用できるかどうか。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 拡張スロットを使用できません。 • [有効 (Enabled)] : 拡張スロットを使用できます。 • [UEFI のみ (UEFI-Only)][UEFI のみ (UEFI_Only)] : UEFIでのみ拡張スロットを使用できます。 • [レガシーのみ (Legacy-Only)][レガシーのみ (Legacy_Only)] : レガシーでのみ拡張スロットを使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[PCIe スロット : n リンク速度 (PCIe Slot:n Link Speed)]</p> <p>set slot-link-speed config pcie-slotn-link-speed</p>	<p>このオプションを使用すると、PCIe スロット <i>n</i> に装着されているアダプタカードの最大速度を制限できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [gen1] : 最大 2.5GT/s (ギガトランスファー/秒) までの速度が許可されます。 • [gen2] : 最大 5GT/s までの速度が許可されます。 • [gen3] : 最大 8GT/s までの速度が許可されます。 • [auto] : 最高速度は自動的に設定されます。 • [disabled] : 最大速度は制限されません。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[PCIe スロット : n OptionROM (PCIe Slot:n OptionROM)]</p> <p>set slot-option-rom-enable-configslotn-option-rom-enable</p>	<p>オプション ROM がポートで使用できるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : スロットは使用できません。 • [有効 (Enabled)] : スロットは使用できます。 • [UEFIのみ (UEFI-Only)][UEFIのみ (UEFI_Only)] : スロットはUEFIにのみ使用できます。 • [レガシーのみ (Legacy-Only)][レガシーのみ (Legacy_Only)] : スロットはレガシーにのみ使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[PCIe スロット : HBA OptionROM (PCIe Slot:HBA OptionROM)] ドロップダウンリスト</p> <p>set slot-option-rom-enable-config pcie-hba</p>	<p>オプション ROM が HBA ポートで使用できるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 拡張スロットを使用できません。 • [有効 (Enabled)] : 拡張スロットを使用できます。 • [UEFI のみ (UEFI-Only)][UEFI のみ (UEFI_Only)] : UEFIでのみ拡張スロットを使用できます。 • [レガシーのみ (Legacy-Only)][レガシーのみ (Legacy_Only)] : レガシーでのみ拡張スロットを使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[PCIe スロット : MLOM OptionROM (PCIe Slot:MLOM OptionROM)] ドロップダウンリスト</p> <p>set slot-option-rom-enable-config mlom</p>	<p>オプション ROM が MLOM ポートで使用できるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 拡張スロットを使用できません。 • [有効 (Enabled)] : 拡張スロットを使用できます。 • [UEFI のみ (UEFI-Only)][UEFI のみ (UEFI_Only)] : UEFIでのみ拡張スロットを使用できます。 • [レガシーのみ (Legacy-Only)][レガシーのみ (Legacy_Only)] : レガシーでのみ拡張スロットを使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[PCIe スロット N1 OptionROM : (PCIe Slot:N1 OptionROM)] ドロップダウンリスト</p> <p>set slot-option-rom-enable-config n1</p>	<p>オプション ROM がポートで使用できるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 拡張スロットを使用できません。 • [有効 (Enabled)] : 拡張スロットを使用できます。 • [UEFI のみ (UEFI-Only)][UEFI のみ (UEFI_Only)] : UEFIでのみ拡張スロットを使用できます。 • [レガシーのみ (Legacy-Only)][レガシーのみ (Legacy_Only)] : レガシーでのみ拡張スロットを使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[PCIe スロット N2 OptionROM : (PCIe Slot:N2 OptionROM)] ドロップダウンリスト</p> <p>set slot-option-rom-enable-config n2</p>	<p>オプション ROM がポートで使用できるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 拡張スロットを使用できません。 • [有効 (Enabled)] : 拡張スロットを使用できます。 • [UEFI のみ (UEFI-Only)][UEFI のみ (UEFI_Only)] : UEFIでのみ拡張スロットを使用できます。 • [レガシーのみ (Legacy-Only)][レガシーのみ (Legacy_Only)] : レガシーでのみ拡張スロットを使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[PCIe OptionROM (PCIe OptionROMs)] ドロップ ダウンリスト</p> <p>set option-rom-enable-config option-rom-enable</p>	<p>オプション ROM がすべての拡張ポートで使用できるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 拡張スロットは使用できません。 • [有効 (Enabled)] : 拡張スロットを使用できます。 • [UEFI_Only] : UEFI でのみ拡張スロットを使用できます。 • [レガシーのみ (Legacy-Only)][レガシーのみ (Legacy_Only)] : レガシーでのみ拡張スロットを使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[PCIe Mezz OptionRom]</p> <p>set slot-option-rom-enable-config mezz-slot-option-rom-enable</p>	<p>すべてのメザニン PCIe ポートを有効にするか、または無効にするか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : すべての LOM ポートが無効になります。 • [有効 (Enabled)] : すべての LOM ポートが有効です。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[すべての PCI オンボード LOM ポート (All PCI Onboard LOM Ports)]</p> <p>set lom-ports-config all-lom-ports</p>	<p>すべての LOM ポートが有効であるか、無効であるか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : すべての LOM ポートが無効になります。 • [有効 (Enabled)] : すべての LOM ポートが有効です。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[PCIe 1G LOM 1 リンク (PCIe 1G LOM 1 Link)]</p> <p>set pcie-lom1-link</p>	<p>オプション ROM が 1G LOM ポートで使用できるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 拡張スロットを使用できません。 • [有効 (Enabled)] : 拡張スロットを使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[PCIe 10G LOM 2 リンク (PCIe 10G LOM 2 Link)]</p> <p>set pcie-lom2-link</p>	<p>オプション ROM を 10G LOM ポートで使用できるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : 拡張スロットを使用できません。 • [有効 (Enabled)] : 拡張スロットを使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

グラフィックス構成の BIOS 設定

次の表は、BIOS ポリシーまたはデフォルトの BIOS 設定を介して実行できるグラフィックス構成の BIOS 設定を示しています。

名前	説明
統合グラフィックス (Integrated Graphics) set integrated-graphics-config integrated-graphics	統合グラフィックスを有効にします。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 • [enabled] : 統合グラフィックスが有効になります。 • [disabled] : 統合グラフィックスが無効になります。
開口サイズ (Aperture Size) set integrated-graphics-aperture-config integrated-graphics-aperture	統合グラフィックス コントローラのマッピング メモリのサイズを設定できます。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 • 128mb • 256mb • 512mb • 1024mb • 2048mb • 4096mb
オンボードグラフィックス (Onboard Graphics) set onboard-graphics-config onboard-graphics	オンボードグラフィックス (KVM) を有効にします。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 • [enabled] : オンボードグラフィックスが有効になります。 • [disabled] : オンボードグラフィックスが無効になります。

ブートオプションの BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できるブートオプション BIOS 設定の一覧を示します。

名前	説明
[ブート オプションの再試行 (Boot Option Retry)] set boot-option-retry-config retry	BIOS でユーザ入力を待機せずに非 EFI ベースのブート オプションを再試行するかどうか。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : ユーザ入力を待機してから非 EFI ベースのブート オプションを再試行します。 • [有効 (Enabled)] : ユーザ入力を待機せずに非 EFI ベースのブート オプションを継続的に再試行します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
[Intel Entry SAS RAID] set intel-entry-sas-raid-config sas-raid	Intel SAS Entry RAID モジュールが有効かどうか。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : Intel SAS Entry RAID モジュールは無効です。 • [有効 (Enabled)] : Intel SAS Entry RAID モジュールが有効になります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

名前	説明
<p>[Intel Entry SAS RAID モジュール (Intel Entry SAS RAID Module)]</p> <p>set intel-entry-sas-raid-config sas-raid-module</p>	<p>Intel SAS Entry RAID モジュールがどのように設定されるか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [it-ir-raid] : Intel IT/IR RAID を使用するよう RAID モジュールを設定します。 • [intel-esrtii] : Intel Embedded Server RAID Technology II を使用するよう RAID モジュールを設定します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[オンボード SCU ストレージサポート (Onboard SCU Storage Support)]</p> <p>set onboard-sas-storage-config onboard-sas-ctrl</p>	<p>オンボードソフトウェア RAID コントローラをサーバで使用できるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (Disabled)] : ソフトウェア RAID コントローラを使用できません。 • [有効 (Enabled)] : ソフトウェア RAID コントローラを使用できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

サーバ管理 BIOS 設定

次の表に、BIOS ポリシーまたはデフォルト BIOS 設定を介して実行できるサーバ管理 BIOS 設定の一覧を示します。

全般設定

[名前 (Name)]	説明
<p>[SERR 時の NMI の挿入 (Assert Nmi on Serr)]</p> <p>set assert-nmi-on-serr-config assertion</p>	<p>システムエラー (SERR) の発生時に、BIOS がマスク不能割り込み (NMI) を生成し、エラーをログに記録するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (disabled)] : SERR の発生時に、BIOS は NMI を生成することもエラーをログに記録することもしません。 • [有効 (enabled)] : BIOS は PERR が発生すると NMI を生成し、エラーを記録します。[PERR 時の NMI の挿入 (Assert Nmi on Perr)] を有効にするには、この設定を有効にする必要があります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。
<p>[PERR 時の NMI の挿入 (Assert Nmi on Perr)]</p> <p>set assert-nmi-on-perr-config assertion</p>	<p>プロセッサバスパリティエラー (PERR) の発生時に、BIOS がマスク不能割り込み (NMI) を生成し、エラーをログに記録するかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (disabled)] : PERR の発生時に、BIOS は NMI を生成することもエラーをログに記録することもしません。 • [有効 (enabled)] : BIOS は PERR が発生すると NMI を生成し、エラーを記録します。この設定を使用するには、[SERR 時の NMI の挿入 (Assert Nmi on Serr)] を有効にする必要があります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

[名前 (Name)]	説明
<p>[OS ブート ウォッチドッグ タイマー (OS Boot Watchdog Timer)]</p> <p>set os-boot-watchdog-timer-config os-boot-watchdog-timer</p>	<p>BIOS が定義済みのタイムアウト値を持つウォッチドッグタイマーをプログラムするかどうか。タイマーが切れる前にオペレーティングシステムのブートを完了しない場合、CIMC はシステムをリセットし、エラーがログに記録されます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (disabled)] : サーバのブートにかかる時間をトラッキングするためにウォッチドッグタイマーは使用されません。 • [有効 (enabled)] : サーバブートにかかる時間をウォッチドッグタイマーで追跡します。サーバが事前に定義した時間内にブートしない場合、CIMC はシステムをリセットし、エラーを記録します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>この機能には、オペレーティングシステムのサポートまたは Intel 管理ソフトウェアが必要です。</p>
<p>[OS ブート ウォッチドッグ タイマー タイムアウト ポリシー (OS Boot Watchdog Timer Timeout Policy)]</p> <p>set os-boot-watchdog-timer-policy-config os-boot-watchdog-timer-policy</p>	<p>ウォッチドッグタイマーが切れた場合にシステムで実行されるアクション。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [電源オフ (power-off)] : OS ブート中にウォッチドッグタイマーが期限切れになった場合、サーバは電源オフになります。 • [リセット (reset)] : OS のブート中にウォッチドッグタイマーが切れた場合、サーバはリセットされます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>このオプションは、[OS ブートウォッチドッグタイマー (OS Boot Watchdog Timer)] を有効にした場合にだけ利用できます。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[OS ブート ウォッチドッグ タイマー タイムアウト (OS Boot Watchdog Timer Timeout)] ドロップダウンリスト</p> <p>set os-boot-watchdog-timer-timeout-config os-boot-watchdog-timer-timeout</p>	<p>BIOS でウォッチドッグ タイマーの設定に使用されるタイムアウト値。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [5分 (5-minutes)] : ウォッチドッグ タイマーはOS ブート開始から 5 分後に期限切れになります。 • [10分 (10-minutes)] : ウォッチドッグ タイマーは OS ブート開始から 10 分後に期限切れになります。 • [15分 (15-minutes)] : ウォッチドッグ タイマーは OS ブート開始から 15 分後に期限切れになります。 • [20分 (20-minutes)] : ウォッチドッグ タイマーは OS ブート開始から 20 分後に期限切れになります。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>このオプションは、[OS ブートウォッチドッグタイマー (OS Boot Watchdog Timer)] を有効にした場合にだけ利用できます。</p>
<p>[FRB-2 タイマー (FRB-2 Timer)]</p> <p>set FRB-2</p>	<p>POST 中にシステムがハングした場合に、システムを回復するために FRB-2 タイマーが使用されるかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (disabled)] : FRB-2 タイマーは使用されません。 • [有効 (Enabled)] : POST 中に FRB-2 タイマーが開始され、必要に応じてシステムの回復に使用されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

コンソールリダイレクション設定

[名前 (Name)]	説明
<p>[コンソールリダイレクション (Console Redirection)]</p> <p>set console-redirect-config console-redirect</p>	<p>POST および BIOS のブート中に、シリアルポートをコンソールリダイレクションに使用できるようにします。BIOS のブートが完了し、オペレーティングシステムがサーバを担当すると、コンソールリダイレクションは関連がなくなり、無効になります。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (disabled)] : POST 中にコンソールリダイレクションは発生しません。 • [シリアルポート A (serial-port-a)] : POST 中のコンソールリダイレクションのためシリアルポート A を有効にします。このオプションはブレードサーバおよびラックマウントサーバに対して有効です。 • [シリアルポート B (serial-port-b)] : POST 中のコンソールリダイレクションのためシリアルポート B を有効にし、サーバ管理タスク実行を許可します。このオプションは、ラックマウントサーバでのみ有効です。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOS は、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) このオプションを有効にする場合は、POST 中に表示される Quiet Boot のロゴ画面も無効にします。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[フロー制御 (Flow Control)]</p> <p>set console-redirect-config flow-control</p>	<p>フロー制御にハンドシェイクプロトコルを使用するかどうか。送信要求/クリア ツー センド (RTS/CTS) を使用すると、隠れた端末問題が原因で発生する可能性があるフレームコリジョンを減らすことができます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [なし (none)] : フロー制御は使用されません。 • [rts-cts] : フロー制御に RTS/CTS が使用されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) この設定は、リモート ターミナルアプリケーション上の設定と一致する必要があります。</p>
<p>[ボー レート (BAUD Rate)]</p> <p>set console-redirect-config baud-rate</p>	<p>シリアル ポートの伝送速度として使用されるボー レート。[コンソールリダイレクション (Console Redirection)]を無効にした場合は、このオプションを使用できません。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [9600] : 9600 ボー レートが使用されます。 • [19200] : 19200 ボー レートが使用されます。 • [38400] : 38400 ボー レートが使用されます。 • [57600] : 57600 ボー レートが使用されます。 • [115200] : 115200 ボー レートが使用されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) この設定は、リモート ターミナルアプリケーション上の設定と一致する必要があります。</p>

[名前 (Name)]	説明
<p>[ターミナルタイプ (Terminal Type)] ドリップダウンリスト</p> <p>set console-redirect-config terminal-type</p>	<p>コンソールリダイレクションに使用される文字フォーマットのタイプ。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [pc-ansi] : PC-ANSI 端末フォントが使用されます。 • [vt100] : サポートされている vt100 ビデオ端末とその文字セットが使用されます。 • [vt100-plus] : サポートされている vt100-plus ビデオ端末とその文字セットが使用されます。 • [VT-UTF8] : UTF-8 文字セットのビデオ端末が使用されます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。 <p>(注) この設定は、リモートターミナルアプリケーション上の設定と一致している必要があります。</p>
<p>[レガシー OS リダイレクション (Legacy OS Redirect)]</p> <p>set console-redirect-config legacy-os-redirect</p>	<p>シリアルポートでレガシーなオペレーティングシステム (DOS など) からのリダイレクションを有効にするかどうか。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無効 (disabled)] : コンソールリダイレクションが有効になっているシリアルポートは、レガシーなオペレーティングシステムから認識されません。 • [有効 (enabled)] : コンソールリダイレクションが有効になっているシリアルポートは、レガシーなオペレーティングシステムから認識できます。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

[名前 (Name)]	説明
[Putty キーパッド (Putty KeyPad)] set PuttyFunctionKeyPad	<p>PuTTY ファンクション キーおよびテンキーの最上段のキーのアクションを変更できます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [VT100] : ファンクション キーが ESC OP ~ ESC O[を生成します。 • [LINUX] : Linux 仮想コンソールを模倣します。ファンクション キー F6 ~ F12 はデフォルト モードと同様に動作しますが、F1 ~ F5 は ESC [[A ~ ESC [[E を生成します。 • [XTERMR6] : ファンクション キー F5 ~ F12 がデフォルト モードと同様に動作します。ファンクション キー F1 ~ F4 が ESC OP ~ ESC OS を生成します。これはデジタル端末のキーパッドの上段によって生成されるシーケンスです。 • [SCO] : ファンクション キー F1 ~ F12 が ESC [M ~ ESC [X を生成します。ファンクション および Shift キーが ESC [Y ~ ESC [j を生成します。Ctrl およびファンクション キーが ESC [k ~ ESC [v を生成します。Shift、Ctrl およびファンクション キーが ESC [w ~ ESC [{ を生成します。 • [ESCN] : デフォルト モードです。ファンクション キーはデジタル端末の一般的な動作と一致します。ファンクション キーが ESC [11~ や ESC [12~ などのシーケンスを生成します。 • [VT400] : ファンクション キーがデフォルト モードと同様に動作します。テンキーの最上段のキーが ESC OP ~ ESC OS を生成します。 • [プラットフォームのデフォルト (Platform Default)][platform-default] : BIOSは、サーバタイプとベンダーの BIOS デフォルト値に含まれるこの属性の値を使用します。

BIOS ポリシー

BIOS ポリシーは、サーバまたはサーバグループに対する BIOS 設定値の指定を自動化するポリシーです。ルート組織内のすべてのサーバに対して使用可能なグローバル BIOS ポリシーを作成するか、サブ組織の階層に対してだけ使用可能な BIOS ポリシーを作成できます。

BIOS ポリシーを使用するには、次の手順を実行します。

- 1 Cisco UCS Manager で BIOS ポリシーを作成します。
- 2 BIOS ポリシーを 1 つ以上のサービス プロファイルに割り当てます。
- 3 サービス プロファイルをサーバと関連付けます。

サービス プロファイルを関連付けるときに、Cisco UCS Manager は BIOS ポリシーの設定と一致するようにサーバの BIOS 設定を変更します。BIOS ポリシーを作成せず、BIOS ポリシーをサービス プロファイルに割り当てていない場合は、サーバの BIOS 設定にそのサーバプラットフォームのデフォルトが使用されます。

デフォルトの BIOS 設定

Cisco UCS Manager には、Cisco UCS がサポートするサーバの各タイプのための 1 セットのデフォルト BIOS 設定が含まれています。デフォルトの BIOS 設定は、ルート組織でのみ使用できるグローバル設定です。Cisco UCS でサポートされている各サーバプラットフォームには、一組のデフォルトの BIOS 設定のみを適用できます。デフォルトの BIOS 設定は変更可能ですが、追加のセットは作成できません。

デフォルト BIOS 設定の各セットは、サポートされている特定タイプのサーバ用にそれぞれ設計されており、その特定タイプに属し、サービス プロファイルに BIOS ポリシーが含まれていないサーバすべてに適用されます。

Cisco UCS 実装にサーバ特定の設定によって満たされない特定の要件がある場合を除き、Cisco UCS ドメイン内のサーバの各タイプ用に設計されたデフォルト BIOS 設定を使用することを推奨します。

Cisco UCS Manager では、これらのサーバプラットフォーム固有の BIOS 設定は次のように適用されます。

- サーバに関連付けられるサービス プロファイルには、BIOS ポリシーが含まれません。
- BIOS ポリシーには、特定の設定に応じたプラットフォーム デフォルトのオプションが設定されます。

Cisco UCS Manager によって提供されるデフォルトの BIOS 設定は変更できます。ただし、デフォルトの BIOS 設定に対する変更は、その特定のタイプまたはプラットフォームに属するすべてのサーバに適用されます。特定のサーバの BIOS 設定だけを変更する場合は、BIOS ポリシーを使用することを推奨します。

BIOS ポリシーの作成



(注) Cisco UCS Manager は、BIOS ポリシーまたはデフォルトの BIOS 設定による BIOS 設定の変更を Cisco Integrated Management Controller (CIMC) バッファにプッシュします。これらの変更はバッファ内にとどまり、サーバがリブートされるまでは有効になりません。

設定するサーバで BIOS 設定のサポートを確認することをお勧めします。RAS メモリのミラーリング モードなどの一部の設定は、すべての Cisco UCS サーバでサポートされているわけではありません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織で組織モードを開始します。デフォルト組織モードを開始するには、/ を <i>org-name</i> として入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create bios-policy policy-name	BIOS ポリシーを指定されたポリシー名で作成し、組織 BIOS ポリシー モードを開始します。
ステップ 3	BIOS 設定を設定します。	<p>CLI コマンドに関する各 BIOS 設定のオプションの詳細については、次のトピックを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [メイン (Main)] ページ : メイン BIOS 設定, (2 ページ) • [プロセッサ (Processor)] ページ : プロセッサの BIOS 設定, (4 ページ) • [Intel Directed IO] ページ : Intel Directed I/O BIOS 設定, (22 ページ) • [RAS メモリ (RAS Memory)] ページ : RAS メモリの BIOS 設定, (24 ページ) • [シリアルポート (Serial Port)] ページ : シリアルポートの BIOS 設定, (27 ページ) • [USB] ページ : USB の BIOS 設定, (28 ページ) • [PCI 設定 (PCI Configuration)] ページ : PCI 設定の BIOS 設定, (33 ページ) • [ブートオプション (Boot Options)] ページ : ブートオプションの BIOS 設定, (44 ページ)

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> • [サーバ管理 (Server Management)] ページ: サーバ管理 BIOS 設定, (45 ページ)
ステップ 4	UCS-A /org/bios-policy # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例では、ルート組織下で BIOS ポリシーを作成し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create bios-policy biosPolicy3
UCS-A /org/bios-policy* # set numa-config numa-optimization enabled
UCS-A /org/bios-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/bios-policy #
```

BIOS デフォルトの変更

設定するサーバで BIOS 設定のサポートを確認することをお勧めします。RAS メモリのミラーリングモードなどの一部の設定は、すべての Cisco UCS サーバでサポートされているわけではありません。

Cisco UCS 実装にサーバ特定の設定によって満たされない特定の要件がある場合を除き、Cisco UCS ドメイン内のサーバの各タイプ用に設計されたデフォルト BIOS 設定を使用することを推奨します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope system	システム モードを開始します。
ステップ 2	UCS-A /system # scope server-defaults	サーバ デフォルト モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /system/server-defaults # show platform	(任意) すべてのサーバのプラットフォームの説明を表示します。
ステップ 4	UCS-A /system/server-defaults # scope platform platform-description	指定したサーバでサーバデフォルトモードを開始します。 <i>platform-description</i> 引数に、次のフォーマットを使用して show platform コマンドによって表示されるサーバの説明を入力します: "vendor" model revision。

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>ヒント ベンダーは、すべての句読点を含む show platform コマンドで表示されるとおり正確に入力する必要があります。</p>
ステップ 5	UCS-A /system/server-defaults/platform # scope bios-settings	サーバでサーバ デフォルト BIOS 設定モードを開始します。
ステップ 6	BIOS 設定を再設定します。	<p>CLI コマンドに関する各 BIOS 設定のオプションの詳細については、次のトピックを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [メイン (Main)]ページ: メイン BIOS 設定, (2 ページ) • [プロセッサ (Processor)]ページ: プロセッサの BIOS 設定, (4 ページ) • [Intel Directed IO]ページ: Intel Directed I/O BIOS 設定, (22 ページ) • [RAS メモリ (RAS Memory)]ページ: RAS メモリの BIOS 設定, (24 ページ) • [シリアルポート (Serial Port)]ページ: シリアルポートの BIOS 設定, (27 ページ) • [USB] ページ: USB の BIOS 設定, (28 ページ) • [PCI 設定 (PCI Configuration)]ページ: PCI 設定の BIOS 設定, (33 ページ) • [ブート オプション (Boot Options)]ページ: ブート オプションの BIOS 設定, (44 ページ) • [サーバ管理 (Server Management)]ページ: サーバ管理 BIOS 設定, (45 ページ)
ステップ 7	UCS-A /system/server-defaults/platform/bios-settings # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、プラットフォームの NUMA デフォルト BIOS 設定を変更し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope system
UCS-A /system # scope server-defaults
UCS-A /system/server-defaults # show platform

Platform:
  Product Name Vendor      Model      Revision
  -----
  Cisco B200-M1
                Cisco Systems, Inc.
                N20-B6620-1
                0

UCS-A /system/server-defaults # scope platform "Cisco Systems, Inc." N20-B6620-1 0
UCS-A /system/server-defaults/platform # scope bios-settings
UCS-A /system/server-defaults/platform/bios-settings # set numa-config numa-optimization
disabled
UCS-A /system/server-defaults/platform/bios-settings* # commit-buffer
UCS-A /system/server-defaults/platform/bios-settings #
```

サーバの実際の BIOS 設定の表示

サーバの実際の BIOS 設定を表示するには、次の手順を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope server chassis-id/ <i>server-id</i>	指定サーバのシャーシサーバモードを開始します。
ステップ 2	UCS-A /chassis/server # scope bios	指定したサーバで BIOS モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /chassis/server/bios # scope bios-settings	指定したサーバで BIOS 設定モードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /chassis/server/bios/bios-settings # show setting	BIOS 設定を表示します。 show ? と入力して、 <i>setting</i> で使用可能な値のリストを表示します。

次に、シャーシ 1 のブレード 3 の BIOS 設定を表示する例を示します。

```
UCS-A# scope server 1/3
UCS-A /chassis/server # scope bios
UCS-A /chassis/server/bios # scope bios-settings
UCS-A /chassis/server/bios/bios-settings # show intel-vt-config

Intel Vt Config:
  Vt
  --
  Enabled

UCS-A /chassis/server/bios/bios-settings #
```

トラステッドプラットフォームモジュールの設定

トラステッドプラットフォームモジュール

トラステッドプラットフォームモジュール (TPM) は、サーバの認証に使用するアーティファクトを安全に保存できるコンポーネントです。これらのアーティファクトには、パスワード、証明書、または暗号キーを収録できます。プラットフォームが信頼性を維持していることを確認するうえで効果的なプラットフォームの尺度の保存でも、TPMを使用できます。すべての環境で安全なコンピューティングを実現するうえで、認証 (プラットフォームがその表明どおりのものであることを証明すること) および立証 (プラットフォームが信頼でき、セキュリティを維持していることを証明するプロセス) は必須の手順です。これは Intel Trusted Execution Technology (TXT) セキュリティ機能の要件であり、TPM を搭載したサーバの BIOS 設定でイネーブルにする必要があります。Cisco UCS M4 ブレードおよびラックマウントサーバは、TPM をサポートします。デフォルトでは、TPM はこれらのサーバで有効になっています。



重要

- Cisco UCS Manager をリリース 2.2(4) にアップグレードする場合は、TPM が有効になります。
- TPM が有効な状態で Cisco UCS Manager をリリース 2.2(4) からダウングレードすると、TPM が無効になります。

Intel Trusted Execution Technology

Intel Trusted Execution Technology (TXT) を使用すると、ビジネスサーバ上で使用および保管される情報の保護機能が強化されます。この保護の主要な特徴は、隔離された実行環境および付随メモリ領域の提供にあり、機密データに対する操作をシステムの他の部分から見えない状態で実行することが可能になります。Intel TXT は、暗号キーなどの機密データを保管できる封印されたストレージ領域を提供し、悪意のあるコードからの攻撃時に機密データが漏洩するのを防ぐために利用できます。Cisco UCS M4 ブレードおよびラックマウントサーバは、TXT をサポートしています。デフォルトでは、TXT はこれらのサーバで無効になっています。

TXT は TPM、Intel Virtualization Technology (VT)、および Intel Virtualization Technology for Directed I/O (VT-d) が有効になっている場合にだけ、有効にできます。TXT だけを有効にすると、暗黙的に TPM、VT、および VT-d も有効になります。

信頼できるプラットフォーム

Cisco UCSME-2814 コンピュータカートリッジのモジュラサーバには、TPM および TXT のサポートが含まれています。Cisco UCS M4 ブレードおよびラックマウントサーバは、TPM および TXT をサポートします。UCS Manager リリース 2.5(2) UCS Manager リリース 2.2(4) では、TPM および TXT で次の操作を実行できます。

- TPM の有効化または無効化
- TXT の有効化または無効化
- ブレードサーバの TPM のクリア または ラックマウントサーバの TPM のクリア
- モジュラサーバの TPM のクリア
- TPM のプロパティの表示



(注) Cisco UCS M3 ブレードサーバの場合は、F2 を押して BIOS セットアップ メニューを表示し、設定を変更します。

TPM の有効化または無効化

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の設定モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、/ を <i>org-name</i> として入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create bios-policy <i>policy-name</i>	BIOS ポリシーを指定されたポリシー名で作成し、組織 BIOS ポリシーモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/bios-policy* # set trusted-platform-module-config tpm-support { <i>enabled</i> <i>disabled</i> <i>platform-default</i> }	TPM を有効にするか、無効にするかを指定します。 Platform-default では、TPM は有効になっています。
ステップ 4	UCS-A /org/bios-policy* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。
ステップ 5	UCS-A /org # create service-profile <i>sp-name</i> }	指定されたサービスプロファイルを作成し、サービス プロファイルのコンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 6	UCS-A /org/service-profile* # set bios-policy <i>policy-name</i>	指定された BIOS ポリシーをサービス プロファイルに関連付けます。
ステップ 7	UCS-A /org/service-profile* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 8	UCS-A /org/service-profile # associate server chassis-id / slot-id	サービス プロファイルを 1 つのサーバに関連付けます。

次に、TPM を有効にする例を示します。

```
UCS-A # scope org
UCS-A /org # create bios-policy bpl
UCS-A /org/bios-policy* # set trusted-platform-module-config tpm-support enabled
UCS-A /org/bios-policy* # commit-buffer
UCS-A /org # create service-profile sp1
UCS-A /org/service-profile* # set bios-policy bpl
UCS-A /org/service-profile* # commit-buffer
UCS-A /org/service-profile # associate server 1/2
```

TXT の有効化または無効化

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の設定モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、/ を <i>org-name</i> として入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create bios-policy policy-name	BIOS ポリシーを指定されたポリシー名で作成し、組織 BIOS ポリシー モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/bios-policy* # set intel-trusted-execution-technology-config txt-support {enabled disabled platform-default}	TXT を有効にするか、無効にするかを指定します。Platform-default では、TXT は有効になっています。
ステップ 4	UCS-A /org/bios-policy* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。
ステップ 5	UCS-A /org # create service-profile sp-name}	指定されたサービスプロファイルを作成し、サービス プロファイルのコンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 6	UCS-A /org/service-profile* # set bios-policy policy-name	指定された BIOS ポリシーをサービス プロファイルに関連付けます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	UCS-A /org/service-profile* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。
ステップ 8	UCS-A /org/service-profile # associate server chassis-id / slot-id	サービス プロファイルを1つのサーバに関連付けます。

次に、TXT を有効にする例を示します。

```
UCS-A # scope org
UCS-A /org # create bios-policy bp1
UCS-A /org/bios-policy* # set intel-trusted-execution-technology-config txt-support enabled
UCS-A /org/bios-policy* # commit-buffer
UCS-A /org # create service-profile sp1
UCS-A /org/service-profile* # set bios-policy bp1
UCS-A /org/service-profile* # commit-buffer
UCS-A /org/service-profile # associate server 1/2
```

一貫したデバイスの命名

オペレーティングシステムが一貫した方法でイーサネットインターフェイスに命名できるメカニズムがない場合は、サーバの構成が変更されたネットワーク接続の管理は困難になります。Cisco UCS Manager リリース 2.2(4) で導入された一貫したデバイスの命名 (CDN) を使用すると、イーサネットインターフェイスに一貫した方法で名前を付けることができます。これにより、アダプタまたは他の設定が変更された場合でも、イーサネットインターフェイスの名前がより永続的になります。

vNIC の CDN を設定するには、次の手順を実行します。

- BIOS ポリシーで一貫したデバイスの命名を有効にします。
- BIOS ポリシーとサービス プロファイルを関連付けます。
- vNIC の一貫した命名を設定します。

一貫したデバイスの命名の注意事項と制約事項

- 一貫したデバイスの命名 (CDN) は Windows 2012 R2 でのみサポートされます。その他のオペレーティングシステムではサポートされません。
- CDN は、M3以降のすべてのブレードサーバとラックマウントサーバでサポートされます。
- CDN をサポートするには、BIOS とアダプタ ファームウェアがリリース 2.2(4) バンドルに組み込まれている必要があります。
- Cisco UCS Manager リリース 2.2(4) では、CDN は次のアダプタでのみサポートされます。

- Cisco UCS VIC 1225 (UCSC-PCIE-CSC-02)
 - Cisco UCS MLOM 1227 (UCSC-MLOM-CSC-02)
 - Cisco UCS VIC 1225T (UCSC-PCIE-C10T-02)
 - Cisco UCS MLOM 1227T (UCSC-MLOM-C10T-02)
 - Cisco UCS VIC 1240 (UCSB-MLOM-40G-01)
 - Cisco UCS VIC 1280 (UCS-VIC-M82-8P)
 - Cisco UCS VIC 1340 (UCSB-MLOM-40G-03)
 - Cisco UCS VIC 1380 (UCSB-VIC-M83-8P)
- CDN は vNIC テンプレートおよびダイナミック vNIC ではサポートされません。
 - 同じサービス プロファイル内の複数の vNIC に同じ CDN 名を指定することはできません。
 - CDN 名が vNIC に指定されていない場合は、vNIC 名が CDN 名として使用されます。
 - vNIC に設定する CDN 名は [管理者 CDN 名 (Admin CDN Name)] として表示されます。vNIC に最後に適用された CDN 名は、[オペレータ CDN 名 (Oper CDN Name)] として表示されます。たとえば、「vnic0」という名前の vNIC の [管理者 CDN 名 (Admin CDN Name)] が cdn0 の場合、この vNIC の [オペレータ CDN 名 (Oper CDN Name)] は cdn0 になりますが、同じ vNIC でも [管理者 CDN 名 (Admin CDN Name)] が指定されていない場合は [オペレータ CDN 名 (Oper CDN Name)] は vnic0 になります。
 - Cisco UCS Manager リリース 2.2(4) では、CDN が関連付けられたサーバに割り当てられた BIOS ポリシーで有効な場合、Cisco UCS Manager のダウングレードは禁止されています。
 - Cisco UCS Manager リリース 2.2(4) では、CDN 対応 BIOS ポリシーがサーバに割り当てられている場合は、BIOS ファームウェアのダウングレードは禁止されています。
 - Cisco UCS Manager リリース 2.2(4) では、CDN 対応 BIOS ポリシーがサーバに割り当てられている場合は、アダプタ ファームウェアのダウングレードは禁止されています。
 - 適用された BIOS ポリシーが CDN 非対応から CDN 対応に、または CDN 対応から CDN 非対応に変更された場合は、BIOS 更新プログラムのリポートが有効かどうかに関係なく、警告が表示されホストがリポートします。
 - Windows オペレーティングシステムをインストールする前に、BIOS ポリシーで CDN を有効にし、vNIC に CDN 名を追加しておくことを推奨します。
 - Windows オペレーティングシステムがすでにサーバにインストールされ、CDN が BIOS ポリシーで有効な場合は、次の手順を実行します。
 - 1 ネットワーク ドライバをアンインストールします。
 - 2 システムで非表示のデバイスをスキャンし、それらをアンインストールします。
 - 3 システムで新しいハードウェアを再スキャンし、ネットワーク ドライバを再インストールします。

これを行わないと、vNIC が設定された CDN 名で認識されません。

- サービス プロファイルで、適用された BIOS ポリシーが CDN 非対応から CDN 対応に、または CDN 対応から CDN 非対応に変更された場合は、次の手順を実行します。

- 1 ネットワーク ドライバをアンインストールします。
- 2 システムで非表示のデバイスをスキャンし、それらを削除します。
- 3 システムで新しいハードウェアを再スキャンし、ネットワーク ドライバを再インストールします。



(注) BIOS ポリシーが CDN 対応から CDN 非対応に変更された場合は、CDN 名がシステム上のすべての vNIC から削除されたことを確認します。

- vNIC に変更が加えられた場合、システム上のすべてのデバイスの BDF も変更されます。次に、システムに存在するすべての vNIC の BDF の変更をトリガーするいくつかのシナリオを示します。

- vNIC が追加または削除された場合
- vNIC がシステム上のあるアダプタからシステム上の別のアダプタに移動された場合

これらの変更がシステムに加えられた場合は、次の手順を実行します。

- 1 存在するすべてのネットワーク インターフェイスからネットワーク ドライバをアンインストールします。
- 2 システムで非表示のデバイスをスキャンし、それらをアンインストールします。
- 3 システムで新しいハードウェアを再スキャンし、ネットワーク コントローラにネットワーク ドライバを再インストールします。

非表示のデバイスが削除されないと、ネットワーク アダプタの CDN 名は Cisco UCS Manager に設定されたとおりに表示されません。

各種アダプタが混在する場合の CDN

CDN 名が CDN がサポートされているアダプタと CDN がサポートされていないアダプタが混在するシステム内の vNIC に設定されると、システム配置において、CDN が設定された vNIC が CDN をサポートするアダプタに配置されない場合があります。

CDN が BIOS ポリシーで有効であり、システム配置によって、CDN が設定された vNIC (管理者 CDN 設定済み) が CDN をサポートしていないアダプタに配置された場合は、情報エラーが発生しますが、サービス プロファイルの設定問題は無視されます。

CDN が BIOS ポリシーで有効であり、システム配置によって、vNIC (管理者 CDN 未設定) が CDN をサポートしていないアダプタに配置された場合は、情報エラーが発生しますが、サービス

プロファイルの設定問題は無視されます。この場合、[オペレータ CDN 名 (Oper CDN Name)] は空になり、vNIC 名から派生されません。

CDN 名をサーバのホスト ネットワーク インターフェイス名として展開する場合は、サポートされるアダプタに手動で vNIC を配置する必要があります。

BIOS ポリシーでの一貫したデバイスの命名の有効化

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の設定モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、/ を <i>org-name</i> として入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create bios-policy policy-name	BIOS ポリシーを指定されたポリシー名で作成し、組織 BIOS ポリシーモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/bios-policy* # set consistent-device-name-control cdn-name {enabled disabled platform-default}	一貫したデバイスの命名 (CDN) を有効にするか無効にするかを指定します。
ステップ 4	UCS-A /org/bios-policy* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、BIOS ポリシーでの CDN を有効にする方法を示しています。

```
UCS-A # scope org
UCS-A /org # create bios-policy cdn-bios-policy
UCS-A /org/bios-policy* # set consistent-device-name-control cdn-name enabled
UCS-A /org/bios-policy* # commit-buffer
```

BIOS ポリシーとサービス プロファイルの関連付け

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の設定モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、/ を <i>org-name</i> として入力します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	UCS-A /org # scope service-profile <i>sp-name</i> }	指定したサービス プロファイルのサービス プロファイル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/service-profile # set bios-policy <i>policy-name</i>	指定された BIOS ポリシーをサービスプロファイルに関連付けます。
ステップ 4	UCS-A /org/service-profile* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、CDN が有効の BIOS ポリシーをサービス プロファイルに関連付ける方法を示します。

```
UCS-A # scope org
UCS-A /org # scope service-profile spl
UCS-A /org/service-profile # set bios-policy cdn-bios-policy
UCS-A /org/service-profile* # commit-buffer
```

vNIC の一貫したデバイスの命名の設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の設定モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、/ を <i>org-name</i> として入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope service-profile <i>sp-name</i>	指定したサービス プロファイルのサービス プロファイル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/service-profile # scope vnic <i>vnic-name</i>	指定した vNIC の vNIC コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/service-profile/vnic # set cdn-name <i>cdn-name</i>	vNIC に CDN 名を指定します。
ステップ 5	UCS-A /org/service-profile/vnic* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、vNIC に CDN を設定する例を示します。

```
UCS-A # scope org
```

```
UCS-A /org # scope service-profile sp1
UCS-A /org/service-profile # scope vnic vn1
UCS-A /org/service-profile/vnic # set cdn-name eth0
UCS-A /org/service-profile/vnic* # commit-buffer
```

vNIC の CDN 名の表示

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope server <i>server-num</i>	指定したサーバのサーバ モードを開始します。
ステップ 2	UCS-A /server # scope adapter <i>adapter-id</i>	指定されたアダプタのアダプタ モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /server/adapter # show host-eth-if [detail] [expand]	指定されたアダプタのホスト イーサネット インターフェイスの詳細を表示します。

次に、vNIC の CDN 名を表示する例を示します。

```
UCS-A # scope server 3
UCS-A /server # scope adapter 1
UCS-A /server/adapter # show host-eth-if detail expand

Eth Interface:
  ID: 1
  Dynamic MAC Address: 00:25:B5:00:00:99
  Burned-In MAC Address: 00:00:00:00:00:00
  Model: UCSC-PCIE-CSC-02
  Name: vnic1
  Cdn Name: cdn0
  Admin State: Enabled
  Operability: Operable
  Order: 1
```

vNIC のステータスの表示

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の設定モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、/ を <i>org-name</i> として入力します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	UCS-A /org # scope service-profile <i>sp-name</i>	指定したサービス プロファイルのサービス プロファイル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/service-profile # show vnic [detail] [expand]	指定されたサービス プロファイルの vNIC の詳細を表示します。

次に、vNIC のステータスを表示する例を示します。



- (注) vNIC に設定する CDN 名は、[管理者 CDN 名 (Admin CDN Name)] として表示されます。BIOS ポリシーに最後に適用された CDN 名前は、[オペレータ CDN 名 (Oper CDN Name)] として表示されます。

```
UCS-A# scope org
UCS-A /org # scope service-profile spl
UCS-A /org/service-profile # show vnic detail expand
```

```
vNIC:
Name: vnic1
Fabric ID: B
Dynamic MAC Addr: 00:25:B5:17:47:01
Desired Order: Unspecified
Actual Order: 1
Desired VCon Placement: 2
Actual VCon Placement: 2
Desired Host Port: ANY
Actual Host Port: NONE
Equipment: sys/chassis-2/blade-5/adaptor-3/host-eth-2
Host Interface Ethernet MTU: 1500
Ethernet Interface Admin CDN Name:cdn0
Ethernet Interface Oper CDN Name:cdn0
Template Name:
```

CIMC セキュリティ ポリシー

Cisco UCS Manager は、セキュリティを強化するために次のポリシーを提供しています。

- KVM 管理ポリシー
- IPMI アクセス プロファイル

IPMI アクセス プロファイル

このポリシーでは、IP アドレスを使用して、IPMI コマンドを直接サーバに送信できるかどうかを決定することができます。たとえば、CIMC からセンサー データを取得するためのコマンドを送

信することができます。このポリシーによって、サーバでローカルに認証可能なユーザ名とパスワードを含む IPMI アクセスを定義し、さらにアクセスが読み取り専用であるか読み取り/書き込みであるかを定義します。

また、IPMI アクセス プロファイルで IPMI over LAN をディセーブルまたはイネーブルにして、リモート接続を制限することもできます。IPMI over LAN はデフォルトで、関連付けられていないサーバすべて、および IPMI アクセス ポリシーのないサーバすべてでディセーブルになります。IPMI アクセス ポリシーを作成すると、IPMI over LAN はデフォルトでイネーブルに設定されます。値を変更してディセーブルにしない場合、IPMI over LAN は関連するサーバすべてでイネーブルになります。

このポリシーはサービスプロファイルに組み込む必要があります。また、このサービスプロファイルを有効にするには、サーバに関連付ける必要があります。

IPMI アクセス プロファイルの設定

はじめる前に

次を入手します。

- 適切な権限があり、サーバのオペレーティング システムによる認証が可能なユーザ名
- このユーザ名のパスワード
- ユーザ名と関連付けられている権限

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create ipmi-access-profile profile-name	指定された IPMI アクセス プロファイルを作成し、組織 IPMI アクセス プロファイル モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/ipmi-access-profile # set ipmi-over-lan {disable enable}	リモート接続を確立できるかどうかを決定します。 (注) IPMI over LAN はデフォルトで、関連付けられていないサーバすべて、および IPMI アクセス ポリシーのないサーバすべてでディセーブルになります。IPMI アクセス ポリシーを作成すると、IPMI over LAN はデフォルトでイネーブルに設定されます。値を変更してディセーブルにしない場合、IPMI over LAN は関連するサーバすべてでイネーブルになります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	UCS-A /org/ipmi-access-profile # create ipmi-user <i>ipmi-user-name</i>	指定されたエンドポイントユーザを作成して、組織 IPMI アクセス プロファイル エンドポイント ユーザ モードを開始します。 (注) IPMI アクセス プロファイル内には、それぞれが独自のパスワードと権限を持つエンドポイントユーザを複数作成できます。
ステップ 5	UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user # set password	エンドポイントユーザのパスワードを設定します。 set password コマンドの入力後、パスワードの入力と確認を求められます。セキュリティ上の理由から、入力したパスワードは CLI には表示されません。
ステップ 6	UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user # set privilege {admin readonly}	エンドポイントユーザが管理権限と読み取り専用権限のいずれを持つかを指定します。
ステップ 7	UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、ReadOnly という名前の IPMI アクセス プロファイルを作成し、bob という名前のエンドポイント ユーザを作成し、bob のパスワードと権限を設定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create ipmi-access-profile ReadOnly
UCS-A /org/ipmi-access-profile* # create ipmi-user bob
UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user* # set password
Enter a password:
Confirm the password:
UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user* # set privilege readonly
UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user* # commit-buffer
UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user #
```

次の作業

IPMI プロファイルをサービスプロファイルとテンプレートのうち一方、または両方に含めます。

IPMI アクセス プロファイルの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / と入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # delete ipmi-access-profile profile-name	指定した IPMI アクセス プロファイルを削除します。
ステップ 3	UCS-A /org # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、ReadOnly という名前の IPMI アクセス プロファイルを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # delete ipmi-access-profile ReadOnly
UCS-A /org* # commit-buffer
UCS-A /org #
```

IPMI アクセス プロファイルへのエンドポイント ユーザの追加

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope ipmi-access-profile profile-name	指定した IPMI アクセス プロファイルの組織 IPMI アクセス プロファイル モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/ipmi-access-profile # create ipmi-user ipmi-user-name	指定されたエンドポイント ユーザを作成して、組織 IPMI アクセス プロファイル エンドポイント ユーザ モードを開始します。 (注) IPMI アクセス プロファイル内には、それぞれが独自のパスワードと権限を持つエンドポイントユーザを複数作成できます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user #set password	エンドポイント ユーザのパスワードを設定します。 set password コマンドの入力後、パスワードの入力と確認を求められます。セキュリティ上の理由から、入力したパスワードは CLI には表示されません。
ステップ 5	UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user # set privilege {admin readonly}	エンドポイント ユーザが管理権限と読み取り専用権限のいずれを持つかを指定します。
ステップ 6	UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例では、ReadOnly という名前の IPMI アクセス プロファイルに alice という名前のエンドポイント ユーザを追加し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # scope ipmi-access-profile ReadOnly
UCS-A /org/ipmi-access-profile* # create ipmi-user alice
UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user* # set password
Enter a password:
Confirm the password:
UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user* # set privilege readonly
UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user* # commit-buffer
UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user #
```

IPMI アクセス プロファイルからのエンドポイント ユーザの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、org-name に / と入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope ipmi-access-profile profile-name	指定した IPMI アクセス プロファイルの組織 IPMI アクセス プロファイルモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/ipmi-access-profile # delete ipmi-user epuser-name	IPMI アクセス プロファイルから指定したエンドポイント ユーザを削除します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	UCS-A /org/ipmi-access-profile # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、ReadOnly という名前の IPMI アクセスプロファイルから **alice** という名前のエンドポイントユーザを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope ipmi-access-profile ReadOnly
UCS-A /org/ipmi-access-profile # delete ipmi-user alice
UCS-A /org/ipmi-access-profile* # commit-buffer
UCS-A /org/ipmi-access-profile #
```

KVM 管理ポリシー

KVM 管理ポリシーを使用して、KVM 経由でサーバにアクセスするときに仮想メディア (vMedia) 暗号化を有効にするかどうかを指定できます。

このポリシーはサービスプロファイルに組み込む必要があります。また、このサービスプロファイルを有効にするには、サーバに関連付ける必要があります。



- (注) KVM 仮想メディア (vMedia) セッションがマッピングされた後、KVM 管理ポリシーを変更すると、仮想メディア (vMedia) セッションは失われます。KVM 仮想メディア (vMedia) セッションを再度マッピングする必要があります。

KVM 管理ポリシーの設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create kvm-mgmt-policy policy-name	指定された KVM 管理ポリシーを作成し、組織 KVM 管理ポリシーモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/kvm-mgmt-policy # set descr description	(任意) ポリシーの説明を記します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	UCS-A /org/kvm-mgmt-policy # set vmedia-encryption {disable enable}	vMedia の暗号化を有効にするか無効にするかを指定します。
ステップ 5	UCS-A /org/ipmi-access-profile/ipmi-user # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、KVM_Policy1 という名前の KVM 管理ポリシーを作成し、vMedia の暗号化を有効にし、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create kvm-mgmt-policy KVM_Policy1
UCS-A /org/kvm-mgmt-policy* # set vmedia-encryption enable
UCS-A /org/kvm-mgmt-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/kvm-mgmt-policy #
```

ローカル ディスク設定ポリシーの設定

ローカル ディスク設定ポリシー

このポリシーは、ローカル ドライブのオンボード RAID コントローラを通じて、サーバ上にインストールされているオプションの SAS ローカル ドライブを設定します。このポリシーでは、ローカルディスク設定ポリシーを含むサービスプロファイルに関連付けられたすべてのサーバに対して、ローカルディスク モードを設定できるようにします。

ローカル ディスク モードには次のものがあります。

- [ローカルストレージなし (No Local Storage)]: ディスクレスサーバまたは SAN 専用の設定で使用します。このオプションを選択する場合、このポリシーを使用する任意のサービスプロファイルを、ローカルディスクを持つサーバに関連付けることができません。
- [RAID 0がストライプ済み (RAID 0 Striped)]: データはアレイのすべてのディスクにストライプ化され、高速スループットを提供します。データの冗長性はなく、いずれかのディスクで障害が発生すると、すべてのデータが失われます。
- [RAID 1がミラー済み (RAID 1 Mirrored)]: データが 2 つのディスクに書き込まれ、1 つのディスクで障害が発生した場合でも完全なデータ冗長性を提供します。最大アレイ サイズは、2 つのドライブの小さい方の空き容量に等しくなります。
- [任意の設定 (Any Configuration)]: 変更なしのローカル ディスク設定を転送するサーバ設定で使用します。
- [RAIDなし (No RAID)]: RAID を削除し、ディスク MBR およびペイロードを変更しない状態のままにするサーバ設定で使用します。

[RAIDなし (No RAID)] を選択し、このポリシーをすでに RAID ストレージが設定されているオペレーティングシステムを使用するサーバに適用した場合、ディスクの内容は削除されません。そのため、[RAIDなし (No RAID)] モードの適用後にサーバでの違いがわからないことがあります。よって、ポリシーの RAID 設定と、サーバの [インベントリ (Inventory)] > [ストレージ (Storage)] タブに表示される実際のディスク設定とが一致しない場合があります。

以前のすべての RAID 設定情報をディスクから削除するには、[RAIDなし (No RAID)] コンフィギュレーションモードの適用後にすべてのディスク情報を削除するスクラブ ポリシーを適用します。

- [RAID 5が部分的にストライプ済み (RAID 5 Striped Parity)] : データはアレイのすべてのディスクにストライプ化されます。各ディスクの容量の一部に、ディスクの障害発生時にデータの再構築に使用できるパリティ情報が格納されます。RAID 5 は、高い読み取り要求レートで、アプリケーションに適切なデータ スループットを提供します。
- [RAID 6が部分的にデュアルストライプ済み (RAID 6 Striped Dual Parity)] : データはアレイのすべてのディスクにストライプ化され、2つのパリティディスクを使用して、最大2つの物理ディスクの障害に対する保護を提供します。データブロックの各行に、2セットのパリティデータが格納されます。
- [RAID 10がミラーおよびストライプ済み (RAID 10 Mirrored and Striped)] : RAID 10 はミラー化されたディスクのペアを使用して、完全なデータ冗長性と高いスループットレートを提供します。
- [RAID 50が部分的にストライプおよびストライプ済み] : データが複数のストライプ化されたパリティ ディスク セットにストライプ化され、高いスループットと複数のディスク故障耐性を提供します。
- [RAID 60部分的にストライプおよびストライプ済み] : データが複数のストライプ化されたパリティ ディスク セットにストライプ化され、高いスループットと優れたディスク故障耐性を提供します。

このポリシーはサービス プロファイルに組み込む必要があります。また、このポリシーを有効にするには、サーバに関連付ける必要があります。



- (注) 組み込みオンボード RAID コントローラを搭載した Cisco UCS Manager と統合された Cisco UCS C シリーズサーバの場合、ローカルディスクモードは常に [任意の設定 (Any Configuration)] でなければならず、RAID はコントローラ上で直接設定する必要があります。

すべてのローカル ディスク設定ポリシーに関するガイドライン

ローカル ディスク設定ポリシーを作成する前に、次のガイドラインを考慮してください。

HDD と SSD を混合しない

1 台のサーバや RAID 設定に、HDD と SSD を使用しないでください。

B200 M1 または M2 のデフォルト ローカル ディスク設定ポリシーを使用して、B200 M3 にサービス プロファイルを割り当てない

B200 M1 および M2 サーバと B200 M3 サーバのストレージコントローラで提供される RAID/JBOD サポートは異なっているため、B200 M1 または M2 サーバのデフォルト ローカル ディスク設定ポリシーを含むサービス プロファイルを B200 M3 サーバに割り当てたり、再割り当てを行ったりすることはできません。デフォルトのローカル ディスク設定ポリシーには、[任意の設定 (Any Configuration)] モードまたは JBOD 設定が含まれます。

JBOD モードのサポート

B200 M3 サーバでは、ローカル ディスクの JBOD モードがサポートされています。



(注) ローカル ディスクの JBOD モードをサポートしているのは、B200 M1、B200 M2、B200 M3、B250 M1、B250 M2、B22 M3 ブレード サーバのみです。

RAID 用に設定されているローカル ディスク設定ポリシーに関するガイドライン

MegaRAID ストレージコントローラを搭載したサーバ用のローカル ディスク設定ポリシーに RAID 設定を設定する

ブレード サーバまたは統合されたラックマウント サーバに MegaRAID コントローラが搭載されている場合、そのサーバのサービス プロファイルに含まれるローカル ディスク設定ポリシーでドライブの RAID 設定を設定する必要があります。これを実行するには、そのサーバに定義されている RAID モードのいずれかを使用して、サービス プロファイルのローカル ディスク設定ポリシーを設定するか、[任意の設定 (Any Configuration)] モードと LSI ユーティリティ ツールセットを使用して、RAID ボリュームを作成します。

OS をインストールする前に RAID LUN を設定していないと、インストール時にディスク検出エラーが発生し、「No Device Found」といったエラーメッセージが表示される可能性があります。

サーバ プロファイルで [任意の設定 (Any Configuration)] モードが指定されている場合、RAID 1 クラスタ移行後にサーバが起動しない

RAID 1 クラスタの移行後、サービス プロファイルをサーバに関連付ける必要があります。サービス プロファイル内のローカル ディスク設定ポリシーに [RAID 1] ではなく [任意の設定 (Any Configuration)] モードが設定されていると、RAID LUN は、関連付け中およびその後も「非アクティブ」状態のままになります。その結果、サーバは起動できなくなります。

この問題を回避するには、サーバに関連付けるサービスプロファイルに、移行前の元のサービスプロファイルとまったく同じローカル ディスク設定ポリシーが含まれるようにし、[任意の設定 (Any Configuration)]モードは含まれないようにします。

MegaRAID ストレージコントローラを搭載したサーバ上で JBOD モードを使用しない

MegaRAID ストレージコントローラが搭載されたブレードサーバまたは統合ラックマウントサーバ上で JBOD モードまたは JBOD 操作を設定または使用しないでください。JBOD モードと操作は、このサーバで完全に機能するよう設計されていません。

統合されたラックマウント サーバ内の RAID ボリュームと RAID コントローラはそれぞれ 1 つまで

Cisco UCS Manager と統合されているラックマウントサーバは、Cisco UCS Centralサーバ上に存在するハードドライブの数とは関係なく、RAID ボリュームを 1 つまでしか設定できません。

統合されたラックマウントサーバ内のローカルハードドライブは、1 つの RAID コントローラのみですべて接続される必要があります。Cisco UCS Manager との統合では、ローカルハードドライブが単一のラックマウントサーバ内の複数の RAID コントローラに接続することはサポートされていません。そのため、Cisco UCS Manager と統合されるラックマウントサーバを発注する際は、単一の RAID コントローラ構成を要求することを推奨します。

また、サードパーティ製のツールを使用して、ラックマウントサーバ上に複数の RAID LUN を作成しないでください。Cisco UCS Manager では、そのような設定はサポートされていません。

ブレードサーバ内の RAID ボリュームと RAID コントローラはそれぞれ 1 つまで

ブレードサーバは、サーバ内に存在するドライブの数とは関係なく、RAID ボリュームを 1 つまでしか設定できません。ローカルハードドライブは、1 つの RAID コントローラのみですべて接続される必要があります。たとえば、B200 M3 に LSI コントローラと Intel Patsburg コントローラが搭載されていても、LSI コントローラだけが RAID コントローラとして使用できます。

また、サードパーティ製のツールを使用して、ブレードサーバ上に複数の RAID LUN を作成しないでください。Cisco UCS Manager では、そのような設定はサポートされていません。

ミラー RAID で選択されるディスクの数は 2 つまでにする

ミラー RAID で選択されたディスクの数が 2 つを超えると、RAID 1 は RAID 10 LUN として作成されます。この問題は、Cisco UCS B440 M1 サーバと B440 M2 サーバで発生する可能性があります。

一部のサーバの特定の RAID 設定オプションでは、ライセンスが必要

一部の Cisco UCS サーバには、特定の RAID 設定オプションのライセンスが必要です。Cisco UCS Manager で、このローカルディスクポリシーを含むサービスプロファイルとサーバを関連付けると、Cisco UCS Manager によって選択された RAID オプションに適切なライセンスが備わっているかが確認されます。問題がある場合は、サービスプロファイルを関連付ける際に、Cisco UCS Manager に設定エラーが表示されます。

特定の Cisco UCS サーバの RAID ライセンス情報については、そのサーバの『*Hardware Installation Guide*』を参照してください。

B420 M3 サーバでは全コンフィギュレーションモードはサポートされていない

B420 M3 サーバでは、ローカル ディスク設定ポリシーで、次のような設定オプションはサポートされていません。

- RAID なし
- RAID 6 ストライプ化デュアルパリティ

また、B420 M3 では JBOD モードや操作はサポートされていません。

シングル ディスク **RAID 0** 設定は、一部のブレードサーバではサポートされていない

シングル ディスク RAID 0 設定は、次のブレードサーバではサポートされていません。

- Cisco UCS B200 M1
- Cisco UCS B200 M2
- Cisco UCS B250 M1
- Cisco UCS B250 M2

ローカル ディスク設定ポリシーの作成

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に <i>/</i> を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create local-disk-config-policy policy-name	ローカル ディスク設定ポリシーを作成し、ローカル ディスク設定ポリシー モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/local-disk-config-policy # set descr description	(任意) ローカルディスク設定ポリシーに説明を記入します。
ステップ 4	UCS-A /org/local-disk-config-policy # set mode {any-configuration no-local-storage no-raid raid-0-striped raid-1-mirrored raid-5-striped-parity raid-6-striped-dual-parity raid-10-mirrored-and-striped}	ローカル ディスク設定ポリシーのモードを指定します。
ステップ 5	UCS-A /org/local-disk-config-policy # set protect {yes no}	サーバは、サービス プロファイルとの関連付けが解除されても、ローカル ディスク設定ポリシー内の設定を保持するかどうかを指定します。

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>注意 サーバ内の 1 つ以上のディスクに障害が発生すると、[設定の保護 (Protect Configuration)] は機能しなくなります。</p> <p>サービス プロファイルがサーバから関連付けを解除され、新しいサービス プロファイルが関連付けられると、新しいサービス プロファイルの Protect Configuration プロパティの設定が優先され、前のサービス プロファイルの設定が上書きされます。</p> <p>このオプションが有効になっていると、サーバが稼働停止して再稼働された後でもディスク上のデータは保護されます。従って、サーバとサービス プロファイルとの再アソシエーションは失敗します。</p> <p>(注) このオプションが有効な状態でサーバとサービス プロファイルの関連付けを解除した後、そのサーバに新しいサービス プロファイルに関連付け、そのサービス プロファイル内のローカル ディスク設定ポリシーに前とは異なるプロパティが含まれていると、サーバから設定不一致のエラーが返され、関連付けは失敗します。</p>
ステップ 6	UCS-A /org/local-disk-config-policy # set flexflash-state {enable disable}	FlexFlash SD カードのサポートをイネーブルにするかを指定します。
ステップ 7	UCS-A /org/local-disk-config-policy # set flexflash-raid-reporting-state {enable disable}	FlexFlash RAID レポートのサポートをイネーブルにするかを指定します。 (注) インストールされている SD カードが 1 つだけの場合、FlexFlash インベントリに RAID 状態が [無効 (Disabled)]、RAID ヘルスが [適用しない (NA)] と表示されます。
ステップ 8	UCS-A /org/local-disk-config-policy # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、ローカル ディスク設定ポリシーを設定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create local-disk-config-policy DiskPolicy7
UCS-A /org/local-disk-config-policy* # set mode raid-1-mirrored
UCS-A /org/local-disk-config-policy* # set protect yes
UCS-A /org/local-disk-config-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/local-disk-config-policy #
```

ローカル ディスク設定ポリシーの表示

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # show local-disk-config-policy <i>policy-name</i>	ローカル ディスク ポリシーを表示します。ローカル ディスク ポリシーを設定していない場合は、(create local-disk-config コマンドで作成された) ローカル ディスク設定が表示されます。 (create local-disk-config コマンドで設定された) ローカル ディスク定義を表示します。Serial over LAN 定義が設定されていない場合、およびポリシーが (set local-disk-config-policy コマンドを使用して) 設定されている場合、ポリシーが表示されます。

次に、DiskPolicy7 というローカル ディスク設定ポリシーのローカル ディスク ポリシー情報を表示する例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # show local-disk-config-policy DiskPolicy7

Local Disk Config Policy:
Name: DiskPolicy7
Mode: Raid 1 Mirrored
Description:
Protect Configuration: Yes
```

ローカル ディスク設定ポリシーの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / と入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # delete local-disk-config-policy <i>policy-name</i>	指定したローカルディスク設定ポリシーを削除します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	UCS-A /org # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、DiskPolicy7 という名前のローカルディスク設定ポリシーを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # delete local-disk-config-policy DiskPolicy7
UCS-A /org* # commit-buffer
UCS-A /org #
```

FlexFlash のサポート

概要

Cisco UCS B シリーズおよび C シリーズ M3 および M4 サーバは、内蔵のセキュアデジタル (SD) メモリカードをサポートします。SD カードは、Cisco Flexible Flash ストレージコントローラ (SD カード用スロットが 2 つある PCI ベースのコントローラ) によってホストされます。カードには、HV と呼ばれる単一のパーティションが含まれています。FlexFlash が有効な場合、Cisco UCS Manager には、BIOS とホストオペレーティングシステムの両方に対する USB ドライブとして HV パーティションが表示されます。

FlexFlash はデフォルトでディセーブルになっています。サービスプロファイルで使用されるローカルディスクポリシーで FlexFlash をイネーブルにできます。FlexFlash がローカルディスクポリシーでイネーブルと定義され、サーバが SD カードをサポートしている場合、FlexFlash コントローラはサービスプロファイルを関連付ける際にイネーブルになります。サーバが SD カードをサポートしていない場合や CIMC バージョンが古い場合は、構成エラーメッセージが表示されます。

サポートされるサーバの FlexFlash を無効にすると、ハイパーバイザまたは HV パーティションはホストからすぐに切断されます。FlexFlash コントローラは、関連サービスプロファイルの関連付け解除の一環としてもディセーブルになります。

FlexFlash コントローラはデュアル SD カード用の RAID-1 をサポートします。FlexFlash スクラブポリシーを作成しサーバを再認識することで RAID ペアに新しい SD カードを設定できます。FlexFlash スクラブポリシーは、両方のカードの HV パーティションを削除し、そのカードを正常な RAID 状態にすることができます。



(注) ペアリングが完了したらすぐにスクラブポリシーをディセーブルにします。

HV パーティションから起動するには、SD カードがサービスプロファイルで使用されるブートポリシーで定義されている必要があります。

FlexFlash ファームウェア管理

FlexFlash コントローラファームウェアは、CIMC イメージの一部としてバンドルされます。CIMC をアップグレードする際に、最新のファームウェアバージョンが FlexFlash コントローラで使用可能な場合、コントローラは管理されなくなり、FlexFlash インベントリには、[コントローラ状態 (Controller State)] が [ユーザアクションを待機 (Waiting For User Action)] として、[コントローラ状況 (Controller Health)] が [古いファームウェアを実行中 (Old Firmware Running)] として表示されます。FlexFlash コントローラのファームウェアをアップグレードするには、ボードコントローラの更新を行う必要があります。詳細については、該当する『Cisco UCS B-Series Firmware Management Guide』を参照してください。次の URL で入手できます。http://www.cisco.com/en/US/products/ps10281/products_installation_and_configuration_guides_list.html

Cisco Flexible Flash ストレージコントローラの制約事項：

- Cisco Flexible Flash ストレージコントローラは 16 GB、32 GB および 64 GB の SD カードのみをサポートしています。



(注) 16 GB および 32 GB カードは B200-M3 ブレードサーバでのみサポートされ、64 GB SD カードは B200-M4 ブレードサーバでのみサポートされます。

- ラックサーバの SD カードをブレードサーバで使用したり、ブレードサーバの SD カードをラックサーバで使用することは推奨されません。サーバタイプ間での SD カードの交換は SD カードのデータ損失につながる可能性があります。
- 一部の Cisco UCS C シリーズラックマウントサーバには、4つのパーティション (HV、HUU、SCU、ドライバ) を持つ SD カードが搭載されています。Cisco UCS Manager では HV パーティションのみが表示されます。FlexFlash スクラブポリシーを使用して、4つのパーティションを持つ SD カードを単一 HV パーティションカードに移行できます。
- FlexFlash コントローラは RAID-1 同期 (ミラー再構築) をサポートしません。SD カードが RAID の低下状態である場合、あるいはメタデータエラーがコントローラによって報告された場合は、FlexFlash スクラブポリシーを実行して RAID のためのカードを組み合わせる必要があります。FlexFlash スクラブポリシーの詳細については、[スクラブポリシーの設定](#)、(87 ページ) を参照してください。次の条件によって RAID の低下やメタデータエラーが引き起こされる可能性があります。
 - サーバの 2 番目のスロットに SD カードがすでに存在する状態で、新規または使用済み SD カードを 1 つのスロットへ挿入する。
 - 異なるサーバの 2 つの SD カードを挿入する。
- サーバのファームウェアバージョンは、2.2(1a) 以上が必要です。

FlexFlash FX3S のサポート

リリース 2.2(3) 以降、Cisco UCS Manager では FX3S コントローラによる追加の FlexFlash サポートが可能になりました。FX3S コントローラは次のサーバ上に存在します。

- Cisco UCS B200 M4 ブレード サーバ
- Cisco UCS C220 M4 ラック サーバ
- Cisco UCS C240 M4 ラック サーバ

FX3S 制御を使用した FlexFlash 操作は、Cisco Flexible Flash ストレージ コントローラでの操作と同じです。FlexFlash はデフォルトでは無効で、ローカルディスク ポリシーを使用して有効化されます。また、コントローラをリセットし、SD カードをフォーマットして、一対の SD カードを自動同期させることもできます。

FX3S コントローラの SD カードには、ハイパーバイザと呼ばれる単一のパーティションが含まれています。

Cisco FX3S コントローラの制約事項：

- FX3S コントローラは、32 GB および 64 GB の SD カードのみをサポートします。16 GB のカードはサポートされません。
- ラック サーバの SD カードをブレードサーバで使用したり、ブレードサーバの SD カードをラックサーバで使用することは推奨されません。サーバタイプ間での SD カードの交換は SD カードのデータ損失につながる可能性があります。
- サーバのファームウェアバージョンは、2.2(3a) 以上が必要です。

FlexFlash SD カードのサポートのイネーブル化またはディセーブル化

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope local-disk-config-policy policy-name	指定したローカルディスク設定ポリシー モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/local-disk-config-policy # set flexflash-state {enable disable}	FlexFlash SD カードのサポートをイネーブルにするかを指定します。
ステップ 4	UCS-A /org/local-disk-config-policy # set flexflash-raid-reporting-state {enable disable}	FlexFlash RAID レポートのサポートをイネーブルにするかを指定します。 (注) インストールされている SD カードが 1 つだけの場合、FlexFlash インベントリに RAID 状態が [無効 (Disabled)]、RAID ヘルスが [適用しない (NA)] と表示されます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	UCS-A /org/local-disk-config-policy # commit-buffer	トランザクションをシステムにコミットします。

次の例では、ローカルディスク設定ポリシー デフォルトの FlexFlash SD カードのサポートおよび FlexFlash RAID レポート ステートをイネーブルにし、システムへのトランザクションをコミットする方法を示します。

```
UCS-A# scope org/
UCS-A /org # scope local-disk-config-policy default
UCS-A /org/local-disk-config-policy #set flexflash-state enable
UCS-A /org/local-disk-config-policy# #set flexflash-raid-reporting-state enable
UCS-A /org/local-disk-config-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/local-disk-config-policy #
```

自動同期のイネーブル化

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope chassis chassis-num	指定したシャーシでシャーシモードを開始します。
ステップ 2	UCS-A /chassis # scope server server-num	サーバシャーシモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /chassis/server # scope flexflash-controller controller-id	FlexFlash コントローラ サーバシャーシモードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # pair primary_slot_number	同期していない場合は、選択されたスロット番号のカードをプライマリとして使用して SD カードを再同期します。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • 1 : スロット 1 の SD カードがプライマリとして使用されます。 • 2 : スロット 2 の SD カードがプライマリとして使用されます。
ステップ 5	UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、スロット2のSDカードをプライマリとして使用して再同期する方法を示しています。

```
UCS-A# scope chassis 1
UCS-A /chassis # scope server 1
UCS-A /chassis/server # scope flexflash-controller 1
UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # pair 2
UCS-A /chassis/server/flexflash-controller* # commit-buffer
UCS-A /chassis/server/flexflash-controller #
```

FlexFlash カードのフォーマット

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope chassis <i>chassis-num</i>	指定したシャーシでシャーシモードを開始します。
ステップ 2	UCS-A /chassis # scope server <i>server-num</i>	サーバシャーシモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /chassis/server # scope flexflash-controller <i>controller-id</i>	FlexFlash コントローラ サーバシャーシモードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # format	SD カードをフォーマットします。
ステップ 5	UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、FlexFlash コントローラをフォーマットする例を示します。

```
UCS-A# scope chassis 1
UCS-A /chassis # scope server 1
UCS-A /chassis/server # scope flexflash-controller 1
UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # format
Warning: When committed, UCSM will format the SD Cards.
This will completely erase the data on the SD Cards!!

UCS-A /chassis/server/flexflash-controller* # commit-buffer
UCS-A /chassis/server/flexflash-controller #
```

FlexFlash コントローラのリセット

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope chassis <i>chassis-num</i>	指定したシャーシでシャーシモードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	UCS-A /chassis # scope server <i>server-num</i>	サーバ シャーシ モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /chassis/server # scope flexflash-controller <i>controller-id</i>	FlexFlash コントローラ サーバ シャーシ モードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # reset	指定された FlexFlash コントローラをリセットします。
ステップ 5	UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例では、FlexFlash コントローラをリセットする方法を示します。

```
UCS-A# scope chassis 1
UCS-A /chassis # scope server 1
UCS-A /chassis/server # scope flexflash-controller 1
UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # reset
Warning: When committed, UCSM will reset the FlexFlash Controller.
This will cause the host OS to lose connectivity to the SD Cards.

UCS-A /chassis/server/flexflash-controller* # commit-buffer
UCS-A /chassis/server/flexflash-controller #
```

FlexFlash コントローラのステータスの表示

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope chassis <i>chassis-num</i>	指定したシャーシでシャーシモードを開始します。
ステップ 2	UCS-A /chassis # scope server <i>server-num</i>	サーバ シャーシ モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /chassis/server # scope flexflash-controller <i>controller-id</i>	FlexFlash コントローラ サーバ シャーシ モードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # show detail expand	詳細な FlexFlash コントローラのプロパティを表示します。

次の例は、FlexFlash コントローラと SD カードのステータスを示しています。

```
UCS-A# scope chassis 1
UCS-A /chassis # scope server 1
UCS-A /chassis/server # scope flexflash-controller 1
UCS-A /chassis/server/flexflash-controller # show detail expand
```

```
FlexFlash Controller:
  ID: 1
  Type: SD
  FlexFlash Type: FX3S
  Vendor: Cypress
  Model: FX3S
  Serial: NA
  Firmware Version: 1.3.2 build 158
  Controller State: Connected Partition Over USB To Host
  Controller Health: Old Firmware Running
  RAID State: Enabled Paired
  RAID Health: OK
  Physical Drive Count: 2
  Virtual Drive Count: 1
  RAID Sync Support: Supported
  Operability: Operable
  Oper Qualifier Reason:
  Presence: Equipped
  Current Task:

FlexFlash Card:
  Controller Index: 1
  Slot Number: 1
  Vendor: SE32G
  Model: SE32G
  HW Rev: 8.0
  Serial: 0xa2140794
  Manufacturer ID: 3
  OEM ID: SD
  Manufacturer Date: 2/14
  Size (MB): 30436
  Block Size: 512
  Card Type: FX3S configured
  Write Enabled: Not Write Protected
  Card Health: OK
  Card Mode: Secondary Active
  Operation State: Raid Partition
  Card State: Active
  Write IO Error Count: 0
  Read IO Error Count: 0
  Operability: Operable
  Oper Qualifier Reason:
  Presence: Equipped

FlexFlash Card Drive:
  Name: Hypervisor
  Size (MB): 30432
  Removable: Yes
  Operability: Operable
  Operation State: Raid Partition

Controller Index: 1
Slot Number: 2
Vendor: SE32G
Model: SE32G
HW Rev: 8.0
Serial: 0xa2140742
Manufacturer ID: 3
OEM ID: SD
Manufacturer Date: 2/14
Size (MB): 30436
Block Size: 512
Card Type: FX3S configured
Write Enabled: Not Write Protected
Card Health: OK
Card Mode: Primary
Operation State: Raid Partition
Card State: Active
Write IO Error Count: 0
Read IO Error Count: 0
Operability: Operable
Oper Qualifier Reason:
```

```
Presence: Equipped

FlexFlash Card Drive:
  Name: Hypervisor
  Size (MB): 30432
  Removable: Yes
  Operability: Operable
  Operation State: Raid Partition

Local Disk Config Definition:
  Mode: Any Configuration
  Description:
  Protect Configuration: Yes

UCS-A /chassis/server/flexflash-controller #
```

スクラブポリシーの設定

スクラブポリシーの設定

このポリシーは、ディスクバリプロセス中にサーバのローカルデータおよび BIOS 設定に何が起こるか、サーバがいつ再認識されるか、またはサーバとサービスプロファイルの関連付けがいつ解除されるかを決定します。



(注) ローカルディスクスクラブポリシーは、Cisco UCS Manager によって管理されるハードドライブにのみ適用され、USB ドライブなど他のデバイスには適用されません。

スクラブポリシーの設定に応じて、以下の処理が行われます。

ディスクスクラブ

関連付けが解除された場合は、すべてのローカルドライブのデータに対して次のいずれかの処理が実行されます。

- 有効になっている場合、ローカルドライブ上のすべてのデータが破棄されます。
- 無効になっている場合、ローカルドライブ上のすべてのデータが保持されます（ローカルストレージ設定を含む）。

BIOS 設定スクラブ

スクラブポリシーを含むサービスプロファイルとサーバとの関連付けが解除された場合は、BIOS 設定に対して次のいずれかの処理が実行されます。

- 有効になっている場合は、サーバのすべての BIOS 設定が消去され、サーバタイプとベンダーに応じた BIOS のデフォルトにリセットされます。
- 無効になっている場合は、サーバの既存の BIOS 設定が保持されます。

FlexFlash スクラブ

FlexFlash スクラブにより、新規またはデグレードした SD カードの組み合わせ、FlexFlash メタデータの設定エラーの解決、および 4 パーティションの旧式 SD カードから単一パーティションの SD カードへの移行を実行できます。スクラブポリシーを含むサービスプロファイルとサーバとの関連付けが解除された場合、またはサーバが再認識された場合は、SD カードに対して次のいずれかの処理が実行されます。

- 有効になっている場合は、PNUOS フォーマットユーティリティにより SD カードの HV パーティションがフォーマットされます。SD カードが 2 枚ある場合、それらカードは RAID-1 ペアになっており、両方のカードの HV パーティションが有効と見なされます。スロット 1 のカードはプライマリ、スロット 2 のカードはセカンダリと見なされます。
- 無効になっている場合は、既存の SD カード設定が保持されます。



(注)

- FlexFlash スクラブを行うと SD カードの HV パーティションが消去されるため、FlexFlash スクラブを実行する前に、適切なホストオペレーティングシステムユーティリティを使用して SD カードの完全バックアップを行うことを推奨します。
- サービスプロファイルのメタデータ設定の不具合を解決するには、FlexFlash スクラブを実行する前にローカルディスク設定ポリシーの FlexFlash を無効にして、サーバが再認識された後に FlexFlash を有効にする必要があります。
- ペアリングが完了するか、またはメタデータの不具合が解決したら、ただちにスクラブポリシーを無効にしてください。

スクラブポリシーの作成

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create scrub-policy <i>policy-name</i>	スクラブポリシーを指定されたポリシー名で作成し、組織スクラブポリシーモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/scrub-policy # set descr <i>description</i>	(任意) スクラブポリシーの説明を記入します。

	コマンドまたはアクション	目的
		(注) 説明にスペース、特殊文字、または句読点が含まれている場合は、説明を引用符で括弧する必要があります。引用符は、 show コマンド出力の説明フィールドには表示されません。
ステップ 4	UCS-A /org/scrub-policy # set disk-scrub {no yes}	次のように、このスクラブポリシーを使用するサーバでのディスクスクラブをイネーブル化またはディセーブル化します。 <ul style="list-style-type: none"> 有効になっている場合、ローカルドライブ上のすべてのデータが破棄されます。 無効になっている場合、ローカルドライブ上のすべてのデータが保持されます（ローカルストレージ設定を含む）。
ステップ 5	UCS-A /org/scrub-policy # set bios-settings-scrub {no yes}	次のように、このスクラブポリシーを使用するサーバでの BIOS 設定スクラブをイネーブル化またはディセーブル化します。 <ul style="list-style-type: none"> 有効になっている場合は、サーバのすべての BIOS 設定が消去され、サーバタイプとベンダーに応じた BIOS のデフォルトにリセットされます。 無効になっている場合は、サーバの既存の BIOS 設定が保持されます。
ステップ 6	UCS-A /org/scrub-policy # set flexflash-scrub {no yes}	次のように、このスクラブポリシーを使用するサーバでの flexflash スクラブをイネーブル化またはディセーブル化します。 <ul style="list-style-type: none"> 有効になっている場合は、PNUOS フォーマットユーティリティにより SD カードの HV パーティションがフォーマットされます。SD カードが 2 枚ある場合、それらカードは RAID-1 ペアになっており、両方のカードの HV パーティションが有効と見なされます。スロット 1 のカードはプライマリ、スロット 2 のカードはセカンダリと見なされます。 無効になっている場合は、既存の SD カード設定が保持されます。
ステップ 7	UCS-A /org/scrub-policy # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、ScrubPolicy2 という名前のスクラブ ポリシーを作成し、スクラブ ポリシーを使用するサーバでディスクのスクラブをイネーブルにし、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create scrub-policy ScrubPolicy2
UCS-A /org/scrub-policy* # set descr "Scrub disk but not BIOS."
UCS-A /org/scrub-policy* # set disk-scrub yes
UCS-A /org/scrub-policy* # set bios-settings-scrub no
UCS-A /org/scrub-policy* # set flexflash-scrub no
UCS-A /org/scrub-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/scrub-policy #
```

スクラブポリシーの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。 ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / と入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # delete scrub-policy policy-name	指定したスクラブ ポリシーを削除します。
ステップ 3	UCS-A /org # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、ScrubPolicy2 という名前のスクラブ ポリシーを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # delete scrub-policy ScrubPolicy2
UCS-A /org* # commit-buffer
UCS-A /org #
```

DIMM エラー管理の設定

DIMM の修正可能なエラー処理

Cisco UCS Manager では、DIMM が事前定義されたウィンドウにおいて修正可能な重大エラーに遭遇した場合、ステータスが [低下 (Degraded)] と表され、機能しないデバイスと見なされます。

DIMM の修正可能なエラー処理機能により、サーバ内のすべての DIMM に関する修正可能および修正不可能なメモリエラーをすべてリセットできます。エラー設定をリセットすると、当該 DIMM

のエラー数はクリアされ、ステータスは操作可能に変わり、該当 DIMM のセンサー状態がリセットされます。

メモリ エラーのリセット

Cisco UCS Manager とベースボード管理コントローラ (BMC) で発生したすべての修正可能および修正不可能なメモリ エラーをリセットするには、この手順を使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope chassis chassis-num	指定したシャーシでシャーシモードを開始します。
ステップ 2	UCS-A/chassis # scope server server-num	指定したサーバのサーバモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A/chassis/server # reset-all-memory-errors	サーバ内のすべての DIMM で発生した修正可能および修正不可能なエラーをリセットします。
ステップ 4	UCS-A /chassis/server* # commit-buffer	保留中のすべてのトランザクションをコミットします。

次に、選択されたメモリ ユニットのメモリ エラーをリセットする例を示します。

```
UCS-A# scope chassis 1
UCS-A/chassis # scope server 1
UCS-A/chassis/server # reset-all-memory-errors
UCS-A/chassis/server* # commit-buffer
UCS-A/chassis/server #
```

DIMM のブラックリスト化

Cisco UCS Manager で、デュアル インライン メモリ モジュール (DIMM) の状態は、SEL イベントレコードに基づいています。メモリ テストの実行中に BIOS で修正不可能なメモリ エラーに遭遇した場合、DIMM は不良としてマークされます。不良な DIMM は機能しないデバイスと見なされます。

DIMM のブラックリスト化を有効にすると、Cisco UCS Manager はメモリ テスト実行メッセージをモニタし、DIMM SPD データ内でメモリ エラーに遭遇した DIMM をブラックリストに載せません。これにより、ホストは修正不可能な ECC エラーに遭遇した DIMM をマップから外すことができます。

DIMM のブラックリストのイネーブル化

メモリ ポリシーは、Cisco UCS ドメインの既存のサーバ、およびメモリ ポリシーを設定した後で追加されたサーバに適用できるグローバル ポリシーです。



(注)

- この機能は、Cisco UCS B シリーズ ブレード サーバおよび UCS C シリーズ ラック サーバの両方でサポートされています。



(注) Cisco UCS C シリーズ 420 M3 ラック サーバはこの機能をサポートしていません。

- このグローバル ポリシーをサービス プロファイルに追加することはできません。

はじめる前に

- Cisco B シリーズ ブレード サーバの場合、サーバファームウェアはリリース 2.2(1) 以降のリリースである必要があります。
- シスコ C シリーズ ラック サーバの場合、サーバファームウェアはリリース 2.2(3) である必要があります。
- 次の権限のいずれかでログインする必要があります。
 - Admin
 - サーバ ポリシー
 - サーバ プロファイルのサーバ ポリシー

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org /	ルート組織モードを開始します。
ステップ 2	UCS-A /org # memory-config-policy default	グローバル メモリ ポリシーのメモリ ポリシーモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/memory-config-policy # set blacklisting enabled	DIMM のブラックリストは、ドメイン レベル ポリシーで有効化され、これらの変更は、その特定のドメイン内のすべてのサーバに適用されます。 (注) サーバの Cisco IMC が DIMM のブラックリストをサポートしない場合、情報レベルのエラーが生成されます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	UCS-A /org/memory-config-policy* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、DIMM のブラックリストをイネーブルにする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /chassis/org # scope memory-config-policy default
UCS-A /chassis/org/memory-config-policy # set blacklisting enabled
UCS-A /chassis/org/memory-config-policy* # commit-buffer
UCS-A /chassis/org/memory-config-policy #
UCS-A /chassis/org/memory-config-policy # show detail
```

```
Memory Config Policy:
  Blacklisting: enabled
```

Serial over LAN ポリシーの設定

Serial over LAN ポリシーの概要

このポリシーは、このポリシーを使用するサービスプロファイルと関連付けられているすべてのサーバに対する Serial over LAN 接続の設定を行います。デフォルトでは、Serial over LAN 接続は無効になります。

Serial over LAN ポリシーを実装する場合は、IPMI プロファイルも作成することをお勧めします。

このポリシーはサービスプロファイルに組み込む必要があります。また、このサービスプロファイルを有効にするには、サーバに関連付ける必要があります。

Serial over LAN ポリシーの設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create sol-policy <i>policy-name</i>	Serial over LAN ポリシーを作成し、組織 Serial over LAN ポリシー モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/sol-policy # set descr <i>description</i>	(任意) ポリシーの説明を記します。

	コマンドまたはアクション	目的
		(注) 説明にスペース、特殊文字、または句読点が含まれている場合は、説明を引用符で括弧する必要があります。引用符は、 show コマンド出力の説明フィールドには表示されません。
ステップ 4	UCS-A /org/sol-policy # set speed {115200 19200 38400 57600 9600}	シリアル ボー レートを指定します。
ステップ 5	UCS-A /org/sol-policy # { disable enable }	Serial over LAN ポリシーをディセーブルまたはイネーブルにします。デフォルトでは、Serial over LAN ポリシーはディセーブルです。ポリシーを適用する前にイネーブルにする必要があります。
ステップ 6	UCS-A /org/sol-policy # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、Sol9600 という名前の Serial over LAN ポリシーを作成し、ポリシーの説明を指定し、速度を 9,600 ボーに設定し、ポリシーをイネーブルにし、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # create sol-policy Sol9600
UCS-A /org/sol-policy* # set descr "Sets serial over LAN policy to 9600 baud."
UCS-A /org/sol-policy* # set speed 9600
UCS-A /org/sol-policy* # enable
UCS-A /org/sol-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/sol-policy #
```

Serial over LAN ポリシーの表示

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # show sol-policy policy-name	(create sol-config コマンドで設定された) Serial over LAN 定義を表示します。Serial over LAN 定義が設定されていない場合、およびポリシーが (set sol-policy コマンドを使用して) 設定されている場合、ポリシーが表示されます。

次に、Sol9600 という Serial over LAN ポリシーの Serial over LAN 情報を表示する例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # show sol-policy Sol9600

SOL Policy:
Full Name: Sol9600
SOL State: Enable
Speed: 9600
Description:
```

Serial over LAN ポリシーの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。 ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # delete sol-policy policy-name	指定された Serial over LAN ポリシーを削除します。
ステップ 3	UCS-A /org # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、Sol9600 という名前の Serial over LAN ポリシーを削除し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # delete sol-policy Sol9600
UCS-A /org* # commit-buffer
UCS-A /org #
```

サーバ自動構成ポリシーの設定

サーバ自動構成ポリシーの概要

Cisco UCS Manager では、このポリシーを使用して、新しいサーバの設定方法を決定します。サーバ自動構成ポリシーを作成すると、新しいサーバの起動時に次の処理が行われます。

- 1 サーバに対してサーバ自動構成ポリシーの資格認定が実行されます。
- 2 必要な資格を満たしている場合、サーバは、サーバ自動構成ポリシーで設定されたサービスプロファイルテンプレートから作成されたサービスプロファイルと関連付けられます。そのサービスプロファイルの名前は、Cisco UCS Manager によって付与されるサーバの名前に基づきます。

- 3 サービス プロファイルは、サーバ自動構成ポリシーで設定された組織に割り当てられます。

サーバ自動構成ポリシーの設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create server-autoconfig-policy policy-name	サーバ自動構成ポリシーを指定されたポリシー名で作成し、組織サーバ自動構成ポリシーモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-autoconfig-policy # set descr description	(任意) ポリシーの説明を記します。 (注) 説明にスペース、特殊文字、または句読点が含まれている場合は、説明を引用符で括る必要があります。引用符は、 show コマンド出力の説明フィールドには表示されません。
ステップ 4	UCS-A /org/server-autoconfig-policy # set destination org org-name	(任意) サーバを使用する組織を指定します。
ステップ 5	UCS-A /org/server-autoconfig-policy # set qualifier server-qual-name	(任意) サーバの資格認定にサーバプールポリシー資格情報を使用するように指定します。
ステップ 6	UCS-A /org/server-autoconfig-policy # set template profile-name	(任意) サーバのサービスプロファイルインスタンスを作成するために使用するサービスプロファイルテンプレートを指定します。
ステップ 7	UCS-A /org/server-autoconfig-policy # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、AutoConfigFinance というサーバ自動構成ポリシーを作成し、ポリシーに説明を加え、宛先組織として finance を、サーバプールポリシー資格情報として ServPoolQual22 を、サービスプロファイルテンプレートとして ServTemp2 を指定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # create server-autoconfig-policy AutoConfigFinance
```



```
UCS-A /org/server-autoconfig-policy* # set descr "Server Autoconfiguration Policy for Finance"
UCS-A /org/server-autoconfig-policy* # set destination org finance
UCS-A /org/server-autoconfig-policy* # set qualifier ServPoolQual22
UCS-A /org/server-autoconfig-policy* # set template ServTemp2
UCS-A /org/server-autoconfig-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/server-autoconfig-policy #
```

サーバ自動構成ポリシーの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # delete server-autoconfig-policy policy-name	指定されたサーバ自動構成ポリシーを削除します。
ステップ 3	UCS-A /org # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、AutoConfigFinance という名前のサーバ自動構成ポリシーを削除し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # delete server-autoconfig-policy AutoConfigFinance
UCS-A /org* # commit-buffer
UCS-A /org #
```

サーバディスカバリポリシーの設定

サーバディスカバリポリシーの概要

サーバディスカバリポリシーは、新しいUCSブレードサーバ、UCS Mini、またはUCSMシリーズモジュラサーバを追加したときにUCS Managerがどのように対応するかを決定します。サーバディスカバリポリシーを作成する場合、サーバがシャーンに追加されたときに、システムにより詳細なディスカバリを行うのか、または、ユーザがまず新しいサーバを確認する必要があるのかどうかを制御できます。デフォルトでは、システムにより完全なディスカバリが実行されます。

サーバディスカバリポリシーを作成した場合は、新しいサーバを起動すると次の処理が行われます。

- 1 サーバに対してサーバディスカバリポリシーの資格認定が行われます。

- 2 サーバが必要な資格情報と一致する場合、Cisco UCS Manager はサーバに次の処理を適用します。
 - この処理に関して選択されたオプションに応じて、UCS Manager が新しいサーバをただちに検出するか、または新しいサーバに対するユーザの確認応答を待機する
 - サーバにスクラブ ポリシーを適用する



重要

Cisco UCS Manager リリース 2.2(4) では、ブロック サイズが 4K のドライブはブレードサーバではサポートされませんが、ラックマウントサーバではサポートされます。ブロック サイズが 4 K のドライブがブレードサーバに挿入された場合、検出は失敗し、次のエラーメッセージが表示されます。

システムから SCSI デバイス情報を取得できません (Unable to get Scsi Device Information from the system)

このエラーが発生した場合は、次の手順を実行します。

- 1 4 K のドライブを取り外します。
- 2 サーバを再認識します。

注：サーバを再認識すると、サーバはリブートし、その結果、サービスは失われます。

サーバディスカバリポリシーの設定

はじめる前に

このポリシーとサーバプールを関連付ける予定がある場合は、サーバプールポリシー資格情報を作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org /	ルート組織モードを開始します。 (注) シャーシディスカバリポリシーは、ルート組織からしかアクセスできません。
ステップ 2	UCS-A /org # create server-disc-policy policy-name	サーバディスカバリポリシーを指定されたポリシー名で作成し、組織サーバディスカバリポリシーモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-disc-policy # set action {diag immediate user-acknowledged}	システムが新しいサーバの検出を試みるタイミングを指定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	UCS-A /org/chassis-disc-policy #set descr <i>description</i>	(任意) サーバディスカバリ ポリシーに説明を加えます。 (注) 説明にスペース、特殊文字、または句読点が含まれている場合は、説明を引用符で括る必要があります。引用符は、 show コマンド出力の説明フィールドには表示されません。
ステップ 5	UCS-A /org/server-disc-policy # set qualifier <i>qualifier</i>	(任意) 指定されたサーバプールポリシー資格情報をこのポリシーとサーバプールを関連付けるために使用します。
ステップ 6	UCS-A /org/server-disc-policy # set scrub-policy	このポリシーが使用するスクラブ ポリシーを指定します。スクラブ ポリシーは、検出時にサーバのディスク ドライブをきれいにスクラブするかどうかを定義します。
ステップ 7	UCS-A /org/server-disc-policy # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、ServDiscPolExample という名前のサーバディスカバリ ポリシーを作成し、すぐに新しいサーバを検出するように設定し、ポリシーについて説明を加え、サーバプールポリシー資格情報とスクラブ ポリシーを指定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create server-disc-policy ServDiscPolExample
UCS-A /org/server-disc-policy* # set action immediate
UCS-A /org/server-disc-policy* # set descr "This is an example server discovery policy."
UCS-A /org/server-disc-policy* # set qualifier ExampleQual
UCS-A /org/server-disc-policy* # set scrub-policy NoScrub
UCS-A /org/server-disc-policy # commit-buffer
```

次の作業

サーバディスカバリ ポリシーをサービス プロファイルとテンプレートのうち一方、または両方に含めます。

サーバディスカバリポリシーの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / と入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # Delete server-disc-policy policy-name	指定したサーバディスカバリポリシーを削除します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-disc-policy # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、ServDiscPolExample という名前のサーバディスカバリポリシーを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # delete server-disc-policy ServDiscPolExample
UCS-A /org* # commit-buffer
UCS-A /org #
```

サーバ継承ポリシーの設定

サーバ継承ポリシーの概要

このポリシーは、サーバ用のサービスプロファイルを作成するために、サーバディスカバリプロセス中に呼び出されます。このポリシーから作成されたサービスプロファイルはすべて、製造元でブレードに設定された値を使用します。このポリシーは次の機能を実行します。

- サーバのインベントリの分析
- 選択された組織へのサーバの割り当て（設定されている場合）
- 製造元でサーバに設定された ID を使って、このサーバのサービスプロファイルを作成

このポリシーを使って作成したサービスプロファイルは他のサーバに移行できません。

サーバ継承ポリシーの設定

VIC アダプタが搭載されたブレードサーバまたはラックマウントサーバ（Cisco UCS M81KR 仮想インターフェイスカードなど）、サーバのアイデンティティ値が製造時にサーバハードウェア

に書き込まれていません。その結果、アダプタのアイデンティティは、デフォルトプールから取得する必要があります。デフォルトプールに、サーバに割り当てるのに十分なエントリが格納されていない場合、サービスプロファイルの関連付けが設定エラーで失敗します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create server-inherit-policy policy-name	サーバ継承ポリシーを指定されたポリシー名で作成し、組織サーバ継承ポリシーモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-inherit-policy # set descr description	(任意) ポリシーの説明を記します。 (注) 説明にスペース、特殊文字、または句読点が含まれている場合は、説明を引用符で括る必要があります。引用符は、 show コマンド出力の説明フィールドには表示されません。
ステップ 4	UCS-A /org/server-inherit-policy # set destination org org-name	(任意) サーバを使用する組織を指定します。
ステップ 5	UCS-A /org/server-inherit-policy # set qualifier server-qual-name	(任意) サーバの資格認定にサーバプールポリシー資格情報を使用するように指定します。
ステップ 6	UCS-A /org/server-inherit-policy # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、**InheritEngineering** という名前のサーバ継承ポリシーを作成し、ポリシーに説明を加え、宛先組織として **engineering** を、サーバプールポリシー資格情報として **ServPoolQual22** を指定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # create server-inherit-policy InheritEngineering
UCS-A /org/server-inherit-policy* # set descr "Server Inheritance Policy for Engineering"
UCS-A /org/server-inherit-policy* # set destination org engineering
UCS-A /org/server-inherit-policy* # set qualifier ServPoolQual22
UCS-A /org/server-inherit-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/server-inherit-policy #
```

サーバ継承ポリシーの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # delete server-inherit-policy policy-name	指定されたサーバ継承ポリシーを削除します。
ステップ 3	UCS-A /org # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、InheritEngineering という名前のサーバ継承ポリシーを削除し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # delete server-inherit-policy InheritEngineering
UCS-A /org* # commit-buffer
UCS-A /org #
```

サーバプールポリシーの設定

サーバプールポリシーの概要

このポリシーはサーバディスカバリ プロセス中に呼び出されます。これは、サーバプールポリシー資格情報により、サーバと、ポリシーで指定されたターゲット プールが一致した場合にどのような処理が行われるかを定義します。

サーバが複数のプールに適合したときに、これらのプールにサーバプールポリシーがあった場合、このサーバはこれらすべてのプールに追加されます。

サーバプールポリシーの設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create pooling-policy <i>policy-name</i>	サーバプールポリシーを指定された名前で作成し、組織プールポリシーモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/pooling-policy # set descr <i>description</i>	(任意) サーバプールポリシーに説明を加えます。 (注) 説明にスペース、特殊文字、または句読点が含まれている場合は、説明を引用符で括る必要があります。引用符は、 show コマンド出力の説明フィールドには表示されません。
ステップ 4	UCS-A /org/pooling-policy # set pool <i>pool-distinguished-name</i>	サーバプールポリシーで使用するサーバプールを指定します。プールの完全識別名を指定する必要があります。
ステップ 5	UCS-A /org/pooling-policy # set qualifier <i>qualifier-name</i>	サーバプールポリシーで使用するサーバプール修飾子を指定します。
ステップ 6	UCS-A /org/pooling-policy # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、ServerPoolPolicy4 という名前のサーバプールポリシーを作成し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create pooling-policy ServerPoolPolicy4
UCS-A /org/pooling-policy* # set pool org-root/compute-pool-pool3
UCS-A /org/pooling-policy* # set qualifier ServPoolQual8
UCS-A /org/pooling-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/pooling-policy #
```

サーバプールポリシーの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / と入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # delete pooling-policy policy-name	指定したサーバプールポリシーを削除します。
ステップ 3	UCS-A /org # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、ServerPoolPolicy4 という名前のサーバプールポリシーを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # delete pooling-policy ServerPoolPolicy4
UCS-A /org/pooling-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/pooling-policy #
```

サーバプールポリシーの資格情報の設定

サーバプールポリシー資格情報の概要

このポリシーは、ディスカバリ プロセス中に実行されたサーバのインベントリに基づいて、サーバを資格認定します。資格情報は、サーバが選択基準を満たすかどうかを判断するために、ポリシーで設定されたルールです。たとえば、データセンタープールのサーバの最小メモリ容量を指定するルールを作成できます。

資格情報は、サーバプールポリシーだけでなく、その他のポリシーでも、サーバを配置するために使用されます。たとえば、サーバがある資格ポリシーの基準を満たしている場合、このサーバを1つ以上のサーバプールに追加したり、自動的にサービスプロファイルと関連付けたりできます。

サーバプールポリシー資格情報を使用すると、次の基準に従ってサーバを資格認定できます。

- アダプタのタイプ
- シャーシの場所
- メモリのタイプと設定

- 電源グループ
- CPU のコア数、タイプ、および設定
- ストレージの設定と容量
- サーバのモデル

実装によっては、サーバプールポリシー資格情報を使用して、次を含む複数のポリシーを設定する必要があります。

- 自動構成ポリシー
- シャーシディスクバリ ポリシー
- サーバディスクバリ ポリシー
- サーバ継承ポリシー
- サーバプール ポリシー

サーバプールポリシー資格情報の作成

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に <i>/</i> を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create server-qual server-qual-name	サーバプール資格情報を指定された名前で作成し、組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、ServPoolQual22 という名前のサーバプール資格情報を作成し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # create server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual #
```

次の作業

次のサーバ コンポーネントの 1 つ以上の資格情報を設定します。

- アダプタ資格情報

- シャーシ資格情報
- メモリ資格情報
- 電源グループ資格情報
- プロセッサ資格情報
- ストレージ資格情報

サーバプールポリシーの資格情報の削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # delete server-qual server-qual-name	指定されたサーバプール資格情報を削除します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、ServPoolQual22 という名前のサーバプール資格情報を削除し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # delete server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org* # commit-buffer
UCS-A /org #
```

アダプタ資格情報の作成

はじめる前に

サーバプールポリシー資格情報を作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual <i>server-qual-name</i>	指定したサーバプール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # create adapter	アダプタ資格情報を作成し、組織サーバ資格情報アダプタ モードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual/adapter # create cap-qual <i>adapter-type</i>	指定されたアダプタ タイプのアダプタ容量資格を作成して、組織サーバ資格アダプタ容量資格情報モードを開始します。 <i>adapter-type</i> 引数には、次の任意の値を設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> • fcoe : Fibre Channel over Ethernet • non-virtualized-eth-if : 非仮想化イーサネットインターフェイス • non-virtualized-fc-if : 非仮想化ファイバチャネルインターフェイス • path-encap-consolidated : パス カプセル化統合 • path-encap-virtual : パス カプセル化仮想 • protected-eth-if : 保護されたイーサネットインターフェイス • protected-fc-if : 保護されたファイバチャネルインターフェイス • protected-fcoe : 保護された Fibre Channel over Ethernet • virtualized-eth-if : 仮想化イーサネットインターフェイス • virtualized-fc-if : 仮想化ファイバチャネルインターフェイス • virtualized-scsi-if : 仮想化 SCSI インターフェイス
ステップ 5	UCS-A /org/server-qual/adapter/cap-qual	選択したアダプタ タイプの最大容量を指定します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<code># set maximum {max-cap unspecified}</code>	
ステップ 6	UCS-A /org/server-qual/adapter/cap-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例では、非仮想化イーサネットインターフェイスのアダプタ資格情報を作成して設定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # create adapter
UCS-A /org/server-qual/adapter* # create cap-qual non-virtualized-eth-if
UCS-A /org/server-qual/adapter/cap-qual* # set maximum 2500000000
UCS-A /org/server-qual/adapter/cap-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual/adapter/cap-qual #
```

アダプタ資格情報の削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual server-qual-name	指定したサーバプールポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # delete adapter	サーバプールポリシー資格情報からアダプタ資格情報を削除します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、ServPoolQual22 という名前のサーバプールポリシー資格情報からアダプタ資格情報を削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # delete adapter
UCS-A /org/server-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual #
```

シャーシ資格情報の設定

はじめる前に

サーバプール ポリシー資格情報を作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual <i>server-qual-name</i>	指定したサーバプール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # create chassis <i>min-chassis-num</i> <i>max-chassis-num</i>	指定されたシャーシ範囲のシャーシ資格情報を作成し、組織サーバ資格情報シャーシモードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual/chassis # create slot <i>min-slot-num</i> <i>max-slot-num</i>	指定されたスロット範囲のシャーシスロット資格情報を作成し、組織サーバ資格情報シャーシスロットモードを開始します。
ステップ 5	UCS-A /org/server-qual/chassis/slot # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、シャーシ 1 および 2 のスロット 1 ~ 4 にシャーシ資格情報を設定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org* # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual* # create chassis 1 2
UCS-A /org/server-qual/chassis* # create slot 1 4
UCS-A /org/server-qual/chassis/slot* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual/chassis/slot #
```

シャーシ資格情報の削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual <i>server-qual-name</i>	指定したサーバ プール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # delete chassis <i>min-chassis-num</i> <i>max-chassis-num</i>	指定されたシャーシ範囲のシャーシ資格情報を削除します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、シャーシ 1 および 2 のシャーシ資格情報を削除し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # delete chassis 1 2
UCS-A /org/server-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual #
```

CPU 資格情報の作成

はじめる前に

サーバ プール ポリシー資格情報を作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual <i>server-qual-name</i>	指定したサーバ プール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # create cpu	CPU 資格情報を作成し、組織サーバ資格情報プロセッサ モードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual/cpu # set arch { any dual-core-opteron intel-p4-c opteron pentium-4 turion-64 xeon xeon-mp }	プロセッサのアーキテクチャタイプを指定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	UCS-A /org/server-qual/cpu # set maxcores { <i>max-core-num</i> unspecified }	プロセッサの最大コア数を指定します。
ステップ 6	UCS-A /org/server-qual/cpu # set mincores { <i>min-core-num</i> unspecified }	プロセッサの最小コア数を指定します。
ステップ 7	UCS-A /org/server-qual/cpu # set maxprocs { <i>max-proc-num</i> unspecified }	プロセッサの最大数を指定します。
ステップ 8	UCS-A /org/server-qual/cpu # set minprocs { <i>min-proc-num</i> unspecified }	プロセッサの最小数を指定します。
ステップ 9	UCS-A /org/server-qual/cpu # set maxthreads { <i>max-thread-num</i> unspecified }	スレッドの最大数を指定します。
ステップ 10	UCS-A /org/server-qual/cpu # set minthreads { <i>min-thread-num</i> unspecified }	スレッドの最小数を指定します。
ステップ 11	UCS-A /org/server-qual/cpu # set stepping { <i>step-num</i> unspecified }	プロセッサのステッピング番号を指定します。
ステップ 12	UCS-A /org/server-qual/cpu # set model-regex <i>regex</i>	プロセッサ名が一致する必要がある正規表現を指定します。
ステップ 13	UCS-A /org/server-qual/cpu # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、CPU 資格情報を設定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # create processor
UCS-A /org/server-qual/cpu* # set arch xeon
UCS-A /org/server-qual/cpu* # set maxcores 8
UCS-A /org/server-qual/cpu* # set mincores 4
UCS-A /org/server-qual/cpu* # set maxprocs 2
UCS-A /org/server-qual/cpu* # set minprocs 1
UCS-A /org/server-qual/cpu* # set maxthreads 16
UCS-A /org/server-qual/cpu* # set minthreads 8
UCS-A /org/server-qual/cpu* # set stepping 5
UCS-A /org/server-qual/cpu* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual/cpu #
```

CPU 資格情報の削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。 ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual server-qual-name	指定したサーバプール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # delete cpu	プロセッサ資格情報を削除します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、プロセッサの資格情報を削除し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # delete cpu
UCS-A /org/server-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual #
```

電源グループ資格情報の作成

はじめる前に

サーバプール ポリシー資格情報を作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。 ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual server-qual-name	指定したサーバプール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # create power-group power-group-name	指定された電源グループ名の電源グループ資格情報を作成します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、`powergroup1` という電源グループの電源グループ資格情報を設定し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # create power-group powergroup1
UCS-A /org/server-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual #
```

電源グループ資格情報の削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <code>org-name</code> に <code>/</code> を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual server-qual-name	指定したサーバプール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # delete power-group power-group-name	指定された電源グループ資格情報を削除します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、`powergroup1` という電源グループの電源グループ資格情報を削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # delete power-group powergroup1
UCS-A /org/server-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual #
```

メモリ資格情報の作成

はじめる前に

サーバプール ポリシー資格情報を作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual server-qual-name	指定したサーバプールポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # create memory	メモリ資格情報を作成し、組織サーバ資格情報メモリ モードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual/memory # set clock {clock-num unspec}	メモリのクロック速度を指定します。
ステップ 5	UCS-A /org/server-qual/memory # set maxcap {max-cap-num unspec}	メモリアレイの最大容量を指定します。
ステップ 6	UCS-A /org/server-qual/memory # set mincap {min-cap-num unspec}	メモリアレイの最小容量を指定します。
ステップ 7	UCS-A /org/server-qual/memory # set speed {speed-num unspec}	メモリ データ レートを指定します。
ステップ 8	UCS-A /org/server-qual/memory # set units {unit-num unspec}	メモリユニット（メモリ基板にマウントされている DRAM チップ）の数を指定します。
ステップ 9	UCS-A /org/server-qual/memory # set width {width-num unspec}	データ バスのビット幅を指定します。
ステップ 10	UCS-A /org/server-qual/memory # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、メモリ資格情報を作成して設定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual122
UCS-A /org/server-qual # create memory
UCS-A /org/server-qual/memory* # set clock 1067
UCS-A /org/server-qual/memory* # set maxcap 4096
UCS-A /org/server-qual/memory* # set mincap 2048
UCS-A /org/server-qual/memory* # set speed unspec
```

```
UCS-A /org/server-qual/memory* # set units 16
UCS-A /org/server-qual/memory* # set width 64
UCS-A /org/server-qual/memory* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual/memory #
```

メモリ資格情報の削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。 ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual server-qual-name	指定したサーバプール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # delete memory	メモリ資格情報を削除します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、メモリの資格情報を削除し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual122
UCS-A /org/server-qual # delete memory
UCS-A /org/server-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual #
```

物理的な資格情報の作成

はじめる前に

サーバプール ポリシー資格情報を作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。 ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual <i>server-qual-name</i>	指定したサーバプール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # create physical-qual	物理的な資格情報を作成し、組織サーバ資格情報物理モードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual/physical-qual # set model-regex <i>regex</i>	モデル名が一致する必要がある正規表現を指定します。
ステップ 5	UCS-A /org/server-qual/physical-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、物理的な資格情報を作成して設定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # create physical-qual
UCS-A /org/server-qual/physical-qual* # set model-regex
UCS-A /org/server-qual/physical-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual/physical-qual #
```

物理的な資格情報の削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual <i>server-qual-name</i>	指定したサーバプール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # delete physical-qual	物理的な資格情報を削除します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、物理的な資格情報を削除し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # delete physical-qual
UCS-A /org/server-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual #
```

ストレージ資格情報の作成

はじめる前に

サーバプール ポリシー資格情報を作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual <i>server-qual-name</i>	指定したサーバプール ポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # create storage	ストレージ資格情報を作成し、組織サーバ資格情報ストレージモードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual/storage # set blocksize { <i>block-size-num</i> unknown }	ストレージブロックサイズを指定します。
ステップ 5	UCS-A /org/server-qual/storage # set diskless { no unspecified yes }	使用できるストレージがディスクレスである必要があるかどうかを指定します。
ステップ 6	UCS-A /org/server-qual/storage # set disktype { hdd ssd unspecified }	使用できるディスクのタイプを指定します。次のオプションがあります。 <ul style="list-style-type: none"> • [未指定 (Unspecified)]: どのディスク タイプも受け入れ可能です。 • [HDD]: ディスクは HDD にする必要があります。 • [SSD]: ディスクは SSD (SATA または SAS) にする必要があります。
ステップ 7	UCS-A /org/server-qual/storage # set flexflash-num-cards { <i>ff_card-num</i> unknown }	FlexFlash カードの数を指定します。
ステップ 8	UCS-A /org/server-qual/storage # set maxcap { <i>max-cap-num</i> unknown }	ストレージアレイの最大容量を指定します。
ステップ 9	UCS-A /org/server-qual/storage # set mincap { <i>min-cap-num</i> unknown }	ストレージアレイの最小容量を指定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 10	UCS-A /org/server-qual/storage # set numberofblocks { <i>block-num</i> unknown }	ブロック数を指定します。
ステップ 11	UCS-A /org/server-qual/storage # set perdiskcap { <i>disk-cap-num</i> unknown }	ディスク単位の容量を指定します。
ステップ 12	UCS-A /org/server-qual/storage # set units { <i>unit-num</i> unspecified }	ストレージデバイス数を指定します。
ステップ 13	UCS-A /org/server-qual/storage # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、ストレージ資格情報を作成および設定し、トランザクションをコミットする方法を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # create storage
UCS-A /org/server-qual/storage* # set blocksize 512
UCS-A /org/server-qual/storage* # set disktype hdd
UCS-A /org/server-qual/storage* # set maxcap 420000
UCS-A /org/server-qual/storage* # set mincap 140000
UCS-A /org/server-qual/storage* # set numberofblocks 287277984
UCS-A /org/server-qual/storage* # set perdiskcap 140000
UCS-A /org/server-qual/storage* # set units 1
UCS-A /org/server-qual/storage* # set flexflash-num-cards 2
UCS-A /org/server-qual/storage* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual/storage #
```

ストレージ資格情報の削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope server-qual <i>server-qual-name</i>	指定したサーバプールポリシー資格情報で組織サーバ資格情報モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/server-qual # delete storage	ストレージ資格情報を削除します。
ステップ 4	UCS-A /org/server-qual/ # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次の例は、ストレージの資格情報を削除し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope server-qual ServPoolQual22
UCS-A /org/server-qual # delete storage
UCS-A /org/server-qual* # commit-buffer
UCS-A /org/server-qual #
```

vNIC/vHBA 配置ポリシーの設定

vNIC/vHBA 配置ポリシー

vNIC/vHBA 配置ポリシーは、次のことを決定するために使用されます。

- 仮想ネットワークインターフェイス接続 (vCon) をサーバ上の物理アダプタにマッピングする方法。
- 各 vCon に割り当てることのできる vNIC または vHBA のタイプ。

各 vNIC/vHBA 配置ポリシーには、物理アダプタの仮想表現である vCon が含まれます。vNIC/vHBA 配置ポリシーがサービスプロファイルに割り当てられ、サービスプロファイルがサーバに関連付けられると、vNIC/vHBA 配置ポリシー内の vCon が物理アダプタに割り当てられ、vNIC および vHBA がそれらの vCon に割り当てられます。

1つのアダプタを持つブレードサーバやラックサーバの場合は、Cisco UCS がすべての vCon をそのアダプタに割り当てます。4つのアダプタを持つサーバの場合は、Cisco UCS が vCon1 をアダプタ 1 に、vCon2 をアダプタ 2 に、vCon3 をアダプタ 3 に、vCon4 をアダプタ 4 に割り当てます。

2つまたは3つのアダプタを搭載したブレードサーバまたはラックサーバの場合、Cisco UCS は、サーバのタイプと選択された仮想スロット マッピング スキーム ([ラウンドロビン] または [線形順序]) に基づいて vCon を割り当てます。使用可能なマッピング スキームの詳細については、[vCon のアダプタへの配置](#)、(120 ページ) を参照してください。

Cisco UCS は、vCon の割り当て後、vNIC と vHBA を各 vCon の [選択プリファレンス (Selection Preference)] に基づいて割り当てます。これは、次のいずれかになります。

- [すべて (All)] **all** : 設定されたすべての vNIC と vHBA は、明示的な割り当て、割り当て解除、動的のいずれかで vCon に割り当てられます。これがデフォルトです。
- [割り当てのみ (AssignedOnly)] **assigned-only** : vNICs と vHBA を vCon に明示的に割り当てる必要があります。サービスプロファイルや vNIC または vHBA のプロパティにより、明示的に割り当てることができます。
- [動的を除く (ExcludeDynamic)] **exclude-dynamic** : 動的な vNIC や vHBA を vCon に割り当てることはできません。vCon は静的な vNIC と vHBA に使用可能で、割り当て解除または明示的な割り当てを行います。
- [割り当て解除を除く (ExcludeUnassigned)] **exclude-unassigned** : 割り当て解除された vNIC や vHBA を vCon に割り当てることはできません。vCon は動的な vNIC や vHBA の他、明示的に割り当てられた静的な vNIC や vHBA に使用できます。

- [usNICを除く (Exclude usNIC)]**exclude-usnic** : Cisco usNIC を vCon に割り当てることはできません。vCon は、設定されているその他のすべての vNIC と vHBA に対しては使用可能です。これらの vNIC と vHBA が明示的に割り当てられているか、割り当て解除されているか、または動的かどうかは関係ありません。



(注) [usNICを除く (Exclude usNIC)]**exclude-usnic** に設定されている vCon に明示的に割り当てられている SRIOV usNIC は、引き続きその vCon に割り当てられたままになります。

vNIC/vHBA 配置ポリシーをサービス プロファイルに含めない場合、Cisco UCS Manager はデフォルトで、vCon マッピング スキームを [ラウンドロビン (Round Robin)]、vNIC/vHBA 選択プリファレンスを [すべて (All)] に設定し、各アダプタの機能と相対的な処理能力に基づいて vNIC と vHBA をアダプタ間に配分します。

vCon のアダプタへの配置

Cisco UCS は、サービス プロファイル内のすべての vCon をサーバ上の物理アダプタにマッピングします。マッピングの実行方法、およびサーバ内の特定のアダプタへの vCon の割り当て方法は、次の条件によって決まります。

- サーバのタイプ。2つのアダプタ カードを搭載した N20-B6620-2 および N20-B6625-2 ブレードサーバは、他のサポートされるラック サーバまたはブレードサーバとは異なるマッピング スキームを使用します。
- サーバ内のアダプタの数。
- vNIC/vHBA 配置ポリシー内の仮想スロット マッピング スキームの設定 (該当する場合)。

vNIC および vHBA を vCon に割り当てるための vNIC/vHBA 選択環境設定を設定するときは、この配置を検討する必要があります。



(注) vCon のアダプタへの配置は、アダプタの PCIE スロット番号とは関係ありません。vCon の配置のために使用されるアダプタ番号は、アダプタの PCIE スロット番号ではなく、サーバ検出中にそれらに割り当てられる ID です。

N20-B6620-2 および N20-B6625-2 ブレードサーバでの vCon のアダプタへの配置

N20-B6620-2 および N20-B6625-2 ブレードサーバの場合は、2つのアダプタを左から右に、vCon を右から左に数えます。これらのブレードサーバの1台が1つのアダプタを持つ場合は、Cisco UCS がすべての vCon をそのアダプタに割り当てます。サーバが2つのアダプタを持つ場合は、vCon の割り当ては仮想スロット マッピング スキームに基づいて行われます。

- [ラウンドロビン (Round Robin)] **round-robin** : Cisco UCS は vCon2 と vCon4 をアダプタ 1 に、vCon1 と vCon3 をアダプタ 2 に割り当てます。これがデフォルトです。
- [線形順序 (LinearOrdered)] **linear-ordered** : Cisco UCS は vCon3 と vCon4 をアダプタ 1 に、vCon1 と vCon2 をアダプタ 2 に割り当てます。

vCon のアダプタへの配置 (他のすべてのサポート対象サーバの場合)

N20-B6620-2 および N20-B6625-2 ブレードサーバに加え、Cisco UCS によりサポートされるその他すべてのサーバでは、vCon の割り当ては、サーバに搭載されるアダプタ数と仮想スロットマッピングスキームに応じて異なります。

1つのアダプタを持つブレードサーバやラックサーバの場合は、Cisco UCS がすべての vCon をそのアダプタに割り当てます。4つのアダプタを持つサーバの場合は、Cisco UCS が vCon1 をアダプタ 1 に、vCon2 をアダプタ 2 に、vCon3 をアダプタ 3 に、vCon4 をアダプタ 4 に割り当てます。

2つまたは3つのアダプタを搭載したブレードサーバまたはラックサーバの場合、Cisco UCS は、選択した仮想スロットマッピングスキーム ([ラウンドロビン] または [線形順序]) に基づいて vCons を割り当てます。

表 1: ラウンドロビンマッピングスキームを使用した vCon のアダプタへの配置

アダプタの数	vCon1 の割り当て	vCon2 の割り当て	vCon3 の割り当て	vCon4 の割り当て
1	アダプタ1	アダプタ1	アダプタ1	アダプタ1
2	アダプタ1	アダプタ2	アダプタ1	アダプタ2
3	アダプタ1	アダプタ2	アダプタ3	アダプタ2
4	アダプタ1	アダプタ2	アダプタ3	アダプタ4

[ラウンドロビン (Round Robin)] はデフォルトのマッピングスキームです。

表 2: 線形順序マッピングスキームを使用した vCon のアダプタへの配置

アダプタの数	vCon1 の割り当て	vCon2 の割り当て	vCon3 の割り当て	vCon4 の割り当て
1	アダプタ1	アダプタ1	アダプタ1	アダプタ1
2	アダプタ1	アダプタ1	アダプタ2	アダプタ2
3	アダプタ1	アダプタ2	アダプタ3	アダプタ3
4	アダプタ1	アダプタ2	アダプタ3	アダプタ4



(注) Cisco UCS B440 M2 ブレード サーバに搭載された 2 つのアダプタで vCon ポリシーを使用している場合は、次のマッピングに注意してください。

- 最初に vCon 2 からアダプタ 1 へのマッピング
- 2 番目に vCon 1 からアダプタ 2 へのマッピング

vNIC/vHBA の vCon への割り当て

Cisco UCS Manager には、vNIC/vHBA 配置ポリシーを使用して vNIC および vHBA を vCon に割り当てるオプションが 2 つあります。つまり、明示的割り当てと暗黙的割り当てです。

vNIC および vHBA の明示的割り当て

明示的割り当てでは、vCon を指定してから、vNIC または vHBA を割り当てるアダプタを指定します。この割り当てオプションは、サーバ上のアダプタ間への vNIC および vHBA の配布方法を決定する必要がある場合に使用します。

明示的割り当ての場合に、vCon と関連付けられる vNIC および vHBA を設定するには、次の手順を実行します。

- vCon 設定を任意の使用可能なオプションに設定します。vCon は、vNIC/vHBA 配置ポリシーを使用して設定するか、サーバに関連付けられているサービス プロファイルで設定できます。vCon で [すべて (All)] が設定されている場合でも、vNIC または vHBA をその vCon に明示的に割り当てることができます。
- vNIC および vHBA を vCon に割り当てます。この割り当ては、vNIC または vHBA の仮想ホストインターフェイス配置プロパティを使用して行うか、またはサーバに関連付けられているサービス プロファイルで設定できます

vNIC や vHBA をそれらのタイプに設定されていない vCon に割り当てようとすると、Cisco UCS Manager によって設定エラーが発生したことを示すメッセージが表示されます。

サービス プロファイルの関連付け中に、Cisco UCS Manager は、設定済みの vNIC および vHBA の割り当てを、サーバ内の物理的なアダプタ数および機能と比較して検証し、その後でポリシー内の設定に従って vNIC および vHBA を割り当てます。負荷分散は、このポリシー内で設定された vCon およびアダプタへの明示的な割り当てを元にして実行されます。

1 つ以上の vNIC または vHBA の割り当てがアダプタでサポートされない場合、Cisco UCS Manager は、サービス プロファイルに対する障害を発生させます。

vNIC および vHBA の暗黙的割り当て

暗黙的割り当てでは、Cisco UCS Manager は vCon を決定した後で、アダプタの機能とそれらの相対的な処理能力に基づいて vNIC または vHBA を割り当てるアダプタを決定します。この割り当

てオプションは、vNIC または vHBA が割り当てられるアダプタがシステム設定で重要ではない場合に使用します。

暗黙的割り当ての場合に vCon を設定するには、次の手順を実行します。

- vCon 設定を [すべて (All)]、[動的を除く (Exclude Dynamic)]、または [未割り当てを除く (Exclude Unassigned)] に設定します。vCon は、vNIC/vHBA 配置ポリシーを使用して設定するか、サーバに関連付けられているサービス プロファイルで設定できます。
- vCon 設定を [割当済みのみ (Assigned Only)] にしないでください。この設定を使用して暗黙的割り当てを実行することはできません。
- vNIC または vHBA を vCon に割り当てないでください。

サービス プロファイルの関連付け中に、Cisco UCS Manager は、サーバ内の物理的なアダプタ数および機能を検証し、必要に応じて vNIC および vHBA を割り当てます。負荷分散はアダプタの機能に基づいて実行され、vNIC および vHBA の配置は、システムで決定された実際の順序に従って実行されます。たとえば、1つのアダプタが他のアダプタより多くの vNIC を処理できる場合、そのアダプタにより多くの vNIC が割り当てられます。

サーバに設定されている数の vNIC および vHBA をアダプタでサポートできない場合、Cisco UCS Manager は、サービス プロファイルに対する障害を発生させます。

デュアル アダプタ環境での vNIC の暗黙的割り当て

各スロットにアダプタカードが搭載されたデュアルスロットサーバで暗黙的な vNIC 割り当てを使用する場合、Cisco UCS Manager は通常 vNIC/vHBA を次のように割り当てます。

- サーバの両方のスロットに同じアダプタがある場合、Cisco UCS Manager は、各アダプタに vNIC と vHBA を半分ずつ割り当てます。
- サーバに 1つの非 VIC アダプタと 1つの VIC アダプタがある場合、Cisco UCS Manager は、2つの vNIC と 2つの vHBA を非 VIC アダプタに割り当て、残りの vNIC と vHBA を VIC アダプタに割り当てます。
- サーバに 2つの異なる VIC アダプタがある場合、Cisco UCS Manager は、2つのアダプタの相対的な処理能力に基づいて、vNIC と vHBA を比例的に割り当てます。

次の例は、サポートされるアダプタカードのさまざまな組み合わせに対して、Cisco UCS Manager が vNIC と vHBA をどのように割り当てるのか、その一般的な方法を示しています。

- 4つの vNIC と、2つの Cisco UCS M51KR-B Broadcom BCM57711 アダプタ (それぞれ 2つの vNIC) を搭載したサーバを設定する場合、Cisco UCS Manager は 2つの vNIC を各アダプタに割り当てます。
- 50の vNIC と、Cisco UCS CNA M72KR-E アダプタ (2つの vNIC) および Cisco UCS M81KR 仮想インターフェイス カードアダプタ (128の vNIC) を搭載したサーバを設定する場合、Cisco UCS Manager は、2つの vNIC を Cisco UCS CNA M72KR-E アダプタに割り当て、48の vNIC を Cisco UCS M81KR 仮想インターフェイス カードアダプタに割り当てます。
- 150の vNIC と、Cisco UCS M81KR 仮想インターフェイス カードアダプタ (128の vNIC) および Cisco UCS VIC-1240 仮想インターフェイス カードアダプタ (256の vNIC) を搭載した

サーバを設定する場合、Cisco UCS Manager は、50 の vNIC を Cisco UCS M81KR 仮想インターフェイス カードアダプタに割り当て、100 の vNIC を Cisco UCS VIC-1240 仮想インターフェイス カードアダプタに割り当てます。



- (注) ファブリック フェールオーバー用の vNIC を設定した場合と、サーバ用に動的 vNIC を設定した場合は、この暗黙的割り当ての例外が発生します。

vNIC ファブリックのフェールオーバーが含まれる設定で、1つのアダプタがvNICのフェールオーバーをサポートしない場合、Cisco UCS Manager は、ファブリックのフェールオーバーが有効になっているすべての vNIC を、それらをサポートするアダプタに割り当てます。ファブリックのフェールオーバー用に設定された vNIC のみが設定に含まれる場合、それらをサポートしないアダプタに割り当てられる vNIC はありません。ファブリックのフェールオーバー用に設定された vNIC と設定されていない vNIC がある場合、Cisco UCS Manager は、すべてのフェールオーバー vNIC を、それらをサポートするアダプタに割り当て、上記の比率に従って、少なくとも1つの非フェールオーバー vNIC を、それらをサポートしないアダプタに割り当てます。

動的 vNIC が含まれる設定の場合、同じ暗黙的割り当てが実行されます。Cisco UCS Manager は、すべての動的 vNIC を、それらをサポートするアダプタに割り当てます。ただし、動的 vNIC と静的 vNIC の組み合わせを使用する場合は、少なくとも1つの静的 vNIC が動的 vNIC をサポートしないアダプタに割り当てられます。

vNIC/vHBA 配置ポリシーの設定

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org <i>org-name</i>	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create vcon-policy <i>policy-name</i>	指定された vNIC/vHBA 配置プロファイルを作成し、組織 vCon ポリシー モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/vcon-policy # set descr <i>description</i>	(任意) vNIC/vHBA 配置プロファイルの説明を提供します。 256 文字以内で入力します。次を除く任意の文字またはスペースを使用できます。` (アクセント記号)、\ (円記号)、^ (caret)、" (二重引用符)、= (等号)、> (大なり)、< (小なり)、または' (一重引用符) は使用できません。

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>(注) 説明にスペース、特殊文字、または句読点が含まれている場合は、説明を引用符で括る必要があります。引用符は、show コマンド出力の説明フィールドには表示されません。</p>
ステップ 4	<pre>UCS-A /org/vcon-policy # set mapping-scheme {round-robin linear-ordered}</pre>	<p>(任意)</p> <p>1つのアダプタを持つブレードサーバやラックサーバの場合は、Cisco UCS がすべての vCon をそのアダプタに割り当てます。4つのアダプタを持つサーバの場合は、Cisco UCS が vCon1 をアダプタ 1 に、vCon2 をアダプタ 2 に、vCon3 をアダプタ 3 に、vCon4 をアダプタ 4 に割り当てます。</p> <p>2つまたは3つのアダプタを持つブレードサーバやラックサーバの場合は、Cisco UCS が選択された仮想スロットマッピングスキームに基づいて、vCon を割り当てます。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ラウンドロビン (Round Robin)]round-robin : 2つのアダプタカードを持つサーバの場合は、Cisco UCS は vCon1 と vCon3 をアダプタ 1 に、vCon2 と vCon4 をアダプタ 2 に割り当てます。 3つのアダプタカードを持つサーバの場合は、Cisco UCS が vCon1 をアダプタ 1 に、vCon2 と vCon4 をアダプタ 2 に、vCon3 をアダプタ 3 に割り当てます。 <p>これがデフォルトのスキームです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [線形順序 (LinearOrdered)]linear-ordered : 2つのアダプタカードを持つサーバの場合は、Cisco UCS は vCon1 と vCon2 をアダプタ 1 に、vCon3 と vCon4 をアダプタ 2 に割り当てます。 3つのアダプタカードを持つサーバの場合は、Cisco UCS が vCon1 をアダプタ 1 に、vCon2 をアダプタ 2 に割り当て、vCon3 と vCon4 をアダプタ 3 に割り当てます。 <p>N20-B6620-2 および N20-B6625-2 ブレードサーバの場合は、2つのアダプタを左から右に、vCon を右から左に数えます。これらのブレードサーバの1台が1つのアダプタを持つ場合は、Cisco UCS がすべての vCon をそのアダプタに割り当てます。サーバが2つのアダプタを持つ場合は、vCon の割り当ては仮想スロットマッピングスキームに基づいて行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ラウンドロビン (Round Robin)]round-robin : Cisco UCS は vCon2 と vCon4 をアダプタ 1 に、vCon1 と vCon3 をアダプタ 2 に割り当てます。これがデフォルトです。

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> • [線形順序 (LinearOrdered)] linear-ordered : Cisco UCS は vCon3 と vCon4 をアダプタ 1 に、vCon1 と vCon2 をアダプタ 2 に割り当てます。
ステップ 5	<pre>UCS-A /org/vcon-policy # set vcon {1 2 3 4} selection {all assigned-only exclude-dynamic exclude-unassigned}</pre>	<p>指定された vCon に選択プリファレンスを指定します。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [すべて (All)] all : 設定されたすべての vNIC と vHBA は、明示的な割り当て、割り当て解除、動的のいずれかで vCon に割り当てられます。これがデフォルトです。 • [割り当てのみ (AssignedOnly)] assigned-only : vNICs と vHBA を vCon に明示的に割り当てる必要があります。サービスプロファイルや vNIC または vHBA のプロパティにより、明示的に割り当てることができます。 • [動的を除く (ExcludeDynamic)] exclude-dynamic : 動的な vNIC や vHBA を vCon に割り当てることはできません。vCon は静的な vNIC と vHBA に使用可能で、割り当て解除または明示的な割り当てを行います。 • [割り当て解除を除く (ExcludeUnassigned)] exclude-unassigned : 割り当て解除された vNIC や vHBA を vCon に割り当てることはできません。vCon は動的な vNIC や vHBA の他、明示的に割り当てられた静的な vNIC や vHBA に使用できます。 • [usNICを除く (Exclude usNIC)] exclude-usnic : Cisco usNIC を vCon に割り当てることはできません。vCon は、設定されているその他のすべての vNIC と vHBA に対しては使用可能です。これらの vNIC と vHBA が明示的に割り当てられているか、割り当て解除されているか、または動的かどうかは関係ありません。 <p>(注) [usNICを除く (Exclude usNIC)] exclude-usnic に設定されている vCon に明示的に割り当てられている SRIOV usNIC は、引き続きその vCon に割り当てられたままになります。</p>
ステップ 6	<pre>UCS-A /org/vcon-policy # commit-buffer</pre>	トランザクションをコミットします。

次の例では、Adapter1All という名前の vNIC/vHBA 配置ポリシーを作成し、vCons マッピング方式を [線形順序 (Linear Ordered)] に設定し、割り当てられた vNIC および vHBA のみがアダプタ 1 に配置できるよう指定し、トランザクションをコミットします。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create vcon-policy Adapter1
UCS-A /org/vcon-policy* # set descr "This profile places all vNICs and vHBAs on adapter 1."
UCS-A /org/vcon-policy* # set mapping-scheme linear-ordered
UCS-A /org/vcon-policy* # set vcon 1 selection assigned-only
UCS-A /org/vcon-policy* # commit-buffer
UCS-A /org/vcon-policy* #
UCS-A /org #
```

vNIC/vHBA 配置ポリシーの削除

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。 ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # delete vcon-policy policy-name	指定した vNIC/vHBA 配置プロファイルを削除します。
ステップ 3	UCS-A /org # commit-buffer	トランザクションをコミットします。

次に、Adapter1All という名前の vNIC/vHBA 配置プロファイルを削除し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # delete vcon-policy Adapter1All
UCS-A /org* # commit-buffer
UCS-A /org #
```

vCon への vNIC の明示的割り当て

はじめる前に

vNIC/vHBA 配置ポリシーまたはサービス プロファイルで次のいずれかの値を使用して、vCon を設定します。

- [割り当て済みのみ (Assigned Only)]
- [ダイナミックを除外 (Exclude Dynamic)]
- [未割り当てを除外 (Exclude Unassigned)]

vCon で [すべて (All)] が設定されている場合、vNIC または vHBA をその vCon に明示的に割り当てることができます。しかし、この設定ではほとんど制御ができません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	vCon に明示的に割り当てる vNIC があるサービスプロファイルを含む組織で組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope service-profile profile-name	指定したサービスで組織サービスプロファイルモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/service-profile # scope vnic vnic-name	指定した vNIC で組織サービス プロファイルモードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/service-profile/vnic # set vcon {1 2 3 4 any}	指定した vNIC の vCon (仮想ネットワークインターフェイス接続) の配置を設定します。 いずれかの値を入力すると、Cisco UCS Manager は vNIC の割り当て先の vCon を判別できます。
ステップ 5	UCS-A /org/service-profile/vnic # set order {order-num unspecified}	vNIC の目的の PCI 順序を指定します。 有効な値は 0 ~ 128 および未指定です。
ステップ 6	UCS-A /org/service-profile/vnic # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、vnic3 という vNIC の vCon 配置を 2 に設定し、目的の順序を 10 に設定し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope service-profile accounting
UCS-A /org/service-profile # scope vnic vnic3
UCS-A /org/service-profile/vnic # set vcon 2
UCS-A /org/service-profile/vnic* # set order 10
UCS-A /org/service-profile/vnic* # commit-buffer
UCS-A /org/service-profile/vnic #
```

vCon への vHBA の明示的割り当て

はじめる前に

vNIC/vHBA 配置ポリシーまたはサービス プロファイルで次のいずれかの値を使用して、vCon を設定します。

- [割り当て済みのみ (Assigned Only)]

- [ダイナミックを除外 (Exclude Dynamic)]
- [未割り当てを除外 (Exclude Unassigned)]

vCon で [すべて (All)] が設定されている場合、vNIC または vHBA をその vCon に明示的に割り当てることができます。しかし、この設定ではほとんど制御ができません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	vCon に明示的に割り当てる vHBA があるサービスプロファイルを含む組織で組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope service-profile profile-name	指定したサービスで組織サービス プロファイルモードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/service-profile # scope vhba vhba-name	指定した vHBA で組織サービス プロファイルモードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/service-profile/vhba # set vcon {1 2 3 4 any}	指定した vHBA の vCon (仮想ネットワーク インターフェイス接続) の配置を設定します。 いずれかの値を入力すると、Cisco UCS Manager は vHBA の割り当て先の vCon を判別できます。
ステップ 5	UCS-A /org/service-profile/vhba # set order {order-num unspecified}	vHBA の目的の PCI 順序を指定します。 有効な順序番号値は 0 ~ 128 および未指定です。
ステップ 6	UCS-A /org/service-profile/vhba # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、vhba3 という vHBA の vCon 配置を 2 に設定し、目的の順序を 10 に設定し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # scope service-profile accounting
UCS-A /org/service-profile # scope vhba vhba3
UCS-A /org/service-profile/vhba # set vcon 2
UCS-A /org/service-profile/vhba* # set order 10
UCS-A /org/service-profile/vhba* # commit-buffer
UCS-A /org/service-profile/vhba #
```

ダイナミック vNIC の前にスタティック vNIC を配置

最適なパフォーマンスを得るために、スタティック vNIC とスタティック vHBA は、PCIe バス上のダイナミック vNIC の前に配置する必要があります。スタティック vNIC は、スタティック vNIC

および vHBA の両方を参照します。Cisco UCS Manager リリース 2.1 は、スタティックおよびダイナミック vNIC の順序に関する次の機能を備えています。

- Cisco UCS Manager リリース 2.1 にアップグレードした後、既存のサービス プロファイル（Cisco UCS Manager リリース 2.1 以前のリリースで定義されたプロファイル）に変更がない場合は、vNIC の順序は変更されません。
- Cisco UCS Manager リリース 2.1 へのアップグレード後、vNIC 関連の変更によって vNIC マップの順序が変更されます。その結果、すべてのダイナミック vNIC がスタティック vNIC の後に配置されます。
- Cisco UCS Manager リリース 2.1 で新しく作成されたサービス プロファイルでは、スタティック vNIC が常にダイナミック vNIC の前に順序付けられます。
- 上記の動作は、スタティック vNIC またはダイナミック vNIC の作成または削除の順番に依存しません。
- SRIOV 対応のサービス プロファイルの場合は、UCSM によって対応する仮想関数 (VF) の前に vNIC 物理関数 (PF) が挿入されます。この方式では、VF が PCIe バスおよび BDF 上の親 PF vNIC の近くに配置され、VF の継続的な増分順序になることが保証されます。

例

Cisco UCS Manager リリース 2.0 での当初のデバイス順序

```
dyn-vNIC-1 1
dyn-vNIC-2 2
```

Cisco UCS Manager リリース 2.0 での新たなデバイス順序 (2 つのスタティック vNIC を追加)

```
dyn-vNIC-1 1
dyn-vNIC-2 2
eth-vNIC-1 3
eth-vNIC-2 4
```

Cisco UCS Manager リリース 2.1 へのアップグレード後 (vNIC 関連の変更がサービス プロファイルで行われる前)

```
dyn-vNIC-1 1
dyn-vNIC-2 2
eth-vNIC-1 3
eth-vNIC-2 4
```

Cisco UCS Manager リリース 2.1 での新たなデバイス順序 (ポリシー数を 2 から 4 に変更することによって 2 つのダイナミック vNIC を追加)

```
dyn-vNIC-1 3
dyn-vNIC-2 4
eth-vNIC-1 1
eth-vNIC-2 2
dyn-vNIC-3 5
dyn-vNIC-4 6
```

多機能 PCIe デバイスとしてのダイナミック vNIC

Cisco UCS Manager バージョン 2.1 は、0 機能デバイス (すべてのスタティック vNIC に対応する新しい BUS) としてスタティック vNIC をプロビジョニングします。多機能ダイナミック vNIC は、新しいバス スロットから最後のスタティック vNIC/vHBA の後に配置されます。



(注) Cisco UCS Manager バージョン 2.1 は、新しい StaticZero モードをサポートしています。

表 3: バージョンの互換性

Cisco UCS Manager		
Version 1.4 方式 : ZeroFunction	Version 2.0 方式 : ZeroFunction/MultiFunction	Version 2.1 方式 : ZeroFunction/MultiFunction/StaticZero
スタティックおよびダイナミック vNIC はすべて、バス [0-57]、関数 [0] 上にあります。 < ZeroFunction モード >	スタティック vNIC およびダイナミック vNIC は、バス [0-57]、関数 [0-7] 上にあります。バス 0、関数 0 バス 0、関数 7 バス 1、関数 0 < MultiFunction モード >	スタティック vNIC または PF は、バス [0-57]、関数 [0] 上にあります。SRIOV : 対応する VF が同一バスおよび関数 [1-255] 上にあります。 No-SRIOV : ダイナミック vNIC は、バス [0-57]、関数 [0-7] 上にあります。 < StaticZero モード >
	Balboa からのアップグレードでは、バスが <= 57 になるまで BDF の番号の付け直しは行われません (ZeroFunction モードのまま)。 デバイスが 58 台を超えると、MultiFunction モードに切り替わります。	Balboa からのアップグレードでは、バスが <= 57 になるまで BDF の番号の付け直しは行われません (ZeroFunction モードのまま)。デバイスが 58 台またはプラットフォーム固有の最大 PCIe バス数を超えるか、SRIOV 設定に変更されると、StaticZero モードに切り替わります。
		Cisco UCS Manager バージョン 2.0 からのアップグレードでは、BDF の番号の付け直しは行われません (ZeroFunction/MultiFunction モードのまま)。デバイスが 58 台またはプラットフォーム固有の最大 PCIe バス数を超えるか、SRIOV 設定に変更されると、StaticZero モードに切り替わります。

vNIC/vHBA ホストポートの配置

vNIC/vHBA を vCon に割り当てた後、それを特定のアダプタのホストポートのいずれかに配置できます。配置先のホストポートは明示的に指定するか、または Cisco UCS Manager により自動的にホストポートに vNICs/vHBA を割り当てることができます。



(注) Cisco UCS VIC 1340 および VIC 1380 アダプタをサポートするサーバへの vNIC/vHBA ホストポート配置を実行できます。

vNIC/vHBA のホストポート配置により、アダプタの vNIC/vHBA の順序が決まります。最初のホストポートに配置された vNIC/vHBA は最初に列挙され、2 番目のホストポートの vNIC/vHBA がそれに続きます。

ホストポート配置の設定

Cisco UCS VIC 1340 および VIC 1380 アダプタをサポートするサーバへの vNIC のホストポート配置を実行できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の設定モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、/ を <i>org-name</i> として入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # scope service-profile profile-name	サービスプロファイルのサービスプロファイル組織モードを開始します。
ステップ 3	UCS-A /org/service-profile # scope vnic vnic-name	指定した vNIC で組織サービスプロファイルモードを開始します。
ステップ 4	UCS-A /org/service-profile/vnic # set host-port {1 2 any}	指定した vNIC のホストポートを設定します。 any を入力すると、Cisco UCS Manager は vNIC の割り当て先のホストポートを判別できます。 ホストポートの配置をサポートしないアダプタ上で vNIC のホストポートを設定すると、[実際のホストポート (Actual Host Port)]パラメータは [なし (None)]を表示します。
ステップ 5	UCS-A /org/service-profile/vnic* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	UCS-A /org/service-profile/vnic # show detail	指定した vNIC に関する詳細を表示します。

次の例は、vnic3 という名前の vNIC をホスト ポート 2 に配置し、トランザクションをコミットし、ホスト ポートの情報を表示します。

```
UCS-A# scope org
UCS-A /org # scope service-profile SP-2
UCS-A /org/service-profile # scope vnic vnic3
UCS-A /org/service-profile/vnic # set host-port 2
UCS-A /org/service-profile/vnic* # commit-buffer
UCS-A /org/service-profile/vnic # show detail
vNIC:
  Name: vnic3
  Fabric ID: A
  Dynamic MAC Addr: 00:25:B5:13:13:11
  Desired Order: 2
  Actual Order: 3
  Desired VCon Placement: 1
  Actual VCon Placement: 1
  Desired Host Port: 2
  Actual Host Port: 2
...
UCS-A /org/service-profile/vnic #
```

CIMC マウント vMedia

スクリプト可能な vMedia の使用

Cisco UCS Manager では、リモート UCS サーバの vMedia デバイス ISO イメージをプロビジョニングできます。スクリプト可能な vMedia を使用して、リモートサーバに IMG または ISO イメージをマウントするようにプログラミングできます。CIMC マウント vMedia を使用すると、メディア接続を追加することなく、データセンター内の他のマウントメディア間で通信できるようになります。スクリプト可能な vMedia を使用すると、ブラウザを使用せずに仮想メディア デバイスを制御して、手動で各 UCS サーバを個別にマッピングできます。

スクリプト可能な vMedia は、NFS、CIFS、HTTP、および HTTPS の共有など、複数の共有タイプをサポートします。スクリプト可能な vMedia は、BIOS 設定により有効化し、Web GUI や CLI インターフェイスを介して設定します。

Cisco UCS Manager のスクリプト可能な vMedia は次の機能をサポートしています。

- 特定の vMedia デバイスからのブート
- マウントされた共有からローカル ディスクへのファイルのコピー
- OS ドライバのインストールおよび更新



(注) Cisco UCS Manager によるスクリプト可能な vMedia のサポートは、CIMC にマッピングされているデバイスにのみ適用されます。既存の KVM ベースの vMedia デバイスはサポートされません。

次の条件に合致する場合、vMedia のマウントは失敗します。

- 1 vMedia ポリシー内のリモート vMedia イメージファイル名が [Service-Profile-Name] に設定されている。
- 2 サービス プロファイルの名前が変更されている。

これは、サービスプロファイルの名前を変更しても、vMedia ポリシー内のリモート vMedia イメージファイル名は変更されないためです。イメージファイル名は引き続き、リモートデバイス上の古いイメージをポイントするため、検出できません。

CIMC vMedia ポリシーの作成

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	UCS-A# scope org org-name	指定した組織の組織モードを開始します。ルート組織モードを開始するには、 <i>org-name</i> に / を入力します。
ステップ 2	UCS-A /org # create vmedia-policy policy-name	指定されたポリシー名で vMedia ポリシーを作成します。
ステップ 3	UCS-A /org/vmedia-policy* # create vmedia-mapping mapping -name	指定されたマッピング名で vMedia ポリシーのサブディレクトリを作成します。
ステップ 4	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping # set descr description	(任意) vMedia ポリシーの説明を記入します。 (注) 説明にスペース、特殊文字、または句読点が含まれている場合は、説明を引用符で括弧する必要があります。引用符は、 show コマンド出力の説明フィールドには表示されません。
ステップ 5	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set device type device-type	マウントするリモート vMedia イメージタイプを指定します。オプションは次のとおりです。 • CDD • HDD

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set image-file image-file-name	リモート vMedia のイメージ ファイル名のタイプを指定します。
ステップ 7	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set image-path image-path	リモート vMedia のイメージパスを指定します。
ステップ 8	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set image-variable-name {none service-profile-name}	イメージに使用される名前を指定します。オプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • [none] : 手動でファイル名を入力します。 • [service-profile-name] : ポリシーが関連付けられたサービス プロファイルの名前を自動的に使用します。 <p>(注) [image-variable-name] を [service-profile-name] として指定する場合、サービス プロファイルの名前を変更しないでください。サービス プロファイルの名前を変更すると、仮想メディア (vMedia) のマウントが失敗することがあります。</p>
ステップ 9	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set mount-protocol mount-protocol	リモート vMedia のマウント プロトコルを指定します。オプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • [CIFS] • NFS • HTTP • HTTPS
ステップ 10	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set auth-option { default none ntlm ntlmi ntlmssp ntlmsspi ntlmv2 ntlmv2i }	CIFS 認証オプションを指定します。このコマンドは、リモート vMedia マウントプロトコルとして CIFS を指定する場合にのみ使用できます。他のリモート vMedia マウントプロトコルを選択する場合は使用できません。CIFS 認証オプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • [default] : NT LAN Manager のセキュリティサポートプロバイダー (NTLMSSP) プロトコル。このオプションは、Windows 2008 R2 および Windows 2012 R2 でのみ使用します。

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> • [none] : 認証は使用されません。 • [ntlm] : NT LAN Manager (NTLM) セキュリティプロトコル。このオプションは、Windows 2008 R2 および Windows 2012 R2 でのみ使用します。 • [ntlmi] : NTLMi のセキュリティプロトコル。このオプションは、CIFS Windows サーバでデジタル署名が有効な場合にのみ使用します。 • [ntlmssp] : NT LAN Manager のセキュリティサポートプロバイダー (NTLMSSP) プロトコル。このオプションは、Windows 2008 R2 および Windows 2012 R2 でのみ使用します。 • [ntlmsspi] : このオプションは、CIFS Windows サーバでデジタル署名が有効な場合のみ使用します。 • [ntlmv2] : NTLMv2 セキュリティプロトコル。このオプションは、Samba Linux でのみ使用します。 • [ntlmv2i] : NTLMv2i のセキュリティプロトコル。このオプションは、Samba Linux でのみ使用します。
ステップ 11	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set password	リモート vMedia のイメージパスワードを指定します。
ステップ 12	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set remote-ip remote-ip	リモート vMedia のイメージ IP アドレスを指定します。
ステップ 13	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set user-id user-id	vMedia デバイスをマウントするためのユーザ ID を指定します。
ステップ 14	UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # commit-buffer	トランザクションをシステム設定にコミットします。

次に、vMediaPolicy2 という名前の vMedia ポリシーを作成し、リモート vMedia のデバイス タイプ、マウントプロトコル、イメージの場所を選択し、トランザクションをコミットする例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create vmedia-policy vmediapolicy2
UCS-A /org/vmedia-policy* # create vmedia-mapping map1
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set descr vmedia-map
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set device-type cdd
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set image-file-name win2011.iso
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set image-path cifs
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set image-variable-name service-profile-name
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set mount-protocol cifs
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set auth-option default
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set password Password:
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set remote-ip 172.41.1.158
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # set user-id Administrator
UCS-A /org/vmedia-policy/vmedia-mapping* # commit-buffer
```



(注) vMedia ポリシーが作成されると、[マウント時の再試行の失敗 (Retry on Mount Fail)] オプションが [はい (Yes)] に設定されます。次に、[マウント時の再試行の失敗 (Retry on Mount Fail)] オプションを [いいえ (No)] に変更する例を示します。

```
UCS-A# scope org /
UCS-A /org # create vmedia-policy vmediapolicy2
UCS-A /org/vmedia-policy* # set retry-on-mount-fail No
UCS-A /org/vmedia-policy* # commit-buffer
```



警告

[マウント時の再試行の失敗 (Retry on Mount Fail)] オプションを [いいえ (No)] に設定すると、「これにより、vMedia のマウントに失敗した場合のマウントの自動再試行が無効になります (This will disable automatic retry of mount in case of any vMedia mount failure)」という警告メッセージが表示されます。

